
名無しの影使い

サソリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名無しの影使い

【Nコード】

N4195Z

【作者名】

サソリ

【あらすじ】

ある日、目を覚ますと自分が何者なのか覚えていなかった少年魔導士のお話。

原作、設定を遵守しますので御注意下さい。

プロローグ

「……………」

ゆっくりと重たい目蓋を開けると、爛々と輝く太陽に雲一つない青い空が見えた。

近くに川があるのだろうか、静かに水が流れる音が聞こえる。

ああ、落ち着くな。

久しぶりだ、こんなに暖かい自然を感じるのは……それにしても中々にリアルな夢だな。

このままでは任務に行く気がなくなるよ。何時までも、このまどろみの中に居たい。

……しかしそう言うわけにもいかんだろう。早く夢よ、覚めないか。私は　しないといけないのだから……。

そう考えると、私はゆっくりと目を閉じ、暖かい自然が溢れる夢の世界に別れを告げた。

…

…

…

……はずだった。

次に目を覚まし、目蓋を開けた時に見えた光景は爛々と輝く太陽に雲一つない青い空だった。

……ああ確信したね、これは夢じゃない。

体を温める太陽の光に突き抜けるそよ風。

そして寝転がっている体を包み込んでくれず、痛みつけるかのように固く自己主張する岩盤。

手を延ばせば、ぴちゅんと水に触れた。流れているから川か？……冷たいな。まさか、こんな近くにあるとは……。

それにしても、夢がここまでリアルなものか。

「はあ……どこだよ……」

ゆっくりと上半身だけ起こす。すると私の目には覆い茂る木々と清流のごとく流れる川が見えた。

……知らない場所だ。

それにしても、よくこんなにゴツゴツした岩盤で吞気に寝ていられたものだ。

体のあちこち痛いぞ。しかし、しかしだ、今はそんなことはどうでもいい。

何故こんな場所にいるのだ。それにこんな真っ黒なスーツなんぞ着ていたか？

私は にいたは……あれ？…… ? いや ……
? ……? …… 私はどこにいたんだっけ?

…それより私は何者だ？私の名前は？

…

…

…思い出せないだと……

……まさか記憶喪失だとも言うのか？

いやいや、ただ気が動転して混乱しているだけだろう。もう少し冷静になって考えてみよう。

自分の名前ぐらいはすぐに思い出せるだろうよ。そう考えた私は岩盤に寝転がったまま、思考に没頭する。

……しかし……一向に自分自身のことは何も思い出すことは出来

なかった。

……ややこしいことになった……。

……しかし、しかした。そう焦ることはないな。川や木のこと
が分かるんだ。と言うことは一時的な記憶喪失だろう。

……まあ、何時か思い出すさ……

それより、これからどうするかだな。このまま寝転がっていても
意味はないし、ウジウジ考えていてもどうしようもない。

今は、現状の把握をしなければ二進も三進もいかない状態なのだ。
ここがどこであるかも分かっていないからな。

さて考えるより即行動だ。そう考え、立ち上がった私は、辺りを
見回したが自然以外何もなかった。

人工物がない、どこかの森みたいだな。何故ここにいるかはわか
らないが

【ぐうぐう】

……探索の前に、まずは腹ごしらえをするか。

ふむ、ちょうど川辺にいるんだ。魚でも食べるとするか。

そう思考しながら川をじっと眺めると、光に反射されて私自身の姿が映し出された。

肩口まで伸びた真っ白な髪に、赤色の瞳……。男とも女とも取れる子供のように幼い顔立ち。120センチほどの小さい身体。

……誰だコイツ……

って、それを考える前に飯だ、飯。腹が減っては何もできないからな。

思考を逸らし、川を眺めると魚が泳いでいるのだろう。いくつかの魚影を見つけることができる。

よし、食べ物は豊富にあるようだな。これで一安心と言ったところだ。

さて魔法でも使って……。ふむ……。魔法のことは忘れていないよ

うだ。何とも都合の良い記憶喪失のようだな。

⋮

⋮

⋮

と言いか覚えていないのは本当に自分自身のことだけみたいだな。

っとそれより飯だ。はてさて、魔法はきちんと発動するかな？

【影槍】

ぼそっと小さく呟き、黒光りする魔方陣を足元に展開させる。

すると、その行為によって絶命した魚が、ぷかぷかと浮かんできた。

どうやら魔法は正常に発動し、魚影から漆黒の槍が飛び出して、見事に魚の真ん中を貫いたようだ。

すでに絶命し、影槍によって幾らか体を失い軽くなった魚は沈むことなく、ぷかぷかと浮かんでいる。

「ふむ、一丁上がりというヤツだな」

そしてまた魔方陣を展開させる。次は自分の影から、にゆるにゆると漆黒の手を数本出す。

そして浮かんでいる魚の所まで長く伸ばし数匹の魚を回収した。

ふむ、上出来、上出来

さてお食事の時間だ

「いただきます!!!」

⋮

⋮

⋮

「……知らない天井だ」

またしても知らない場所にいる。どこだ、ここは……

確か私は魚を食べて……から記憶がないな。

「やっと起きたかい」

私が知らない天井を見つめ……いや天井でもないな。あれは木？
もしか……ここは木の中なのか？何とも辺鄙な場所にベットを置いてるものだ。

「聞いているのかい？」

「っ！？……む……何だ、誰だおまえは……」

いきなり喋り掛けられたからビックリしたじゃないか。てか誰だ？この婆さんは……。

私にいきなり話しかけてきたのは、Ｙシャツと長いスカートの上に真っ赤なマントを羽織っている婆さんだった。

ピンク色の髪の毛を頭の後ろでお団子にして金色の髪飾りで止めている。

たぶん若い頃は美人だったろう。

「命の恩人にその態度は酷いもんだね。こちらこそ聞くよ。あんた何者だい？」

「……命の恩人だと？私は助けられた記憶などないが？」

「あんた、あの川の川魚を生で食べただろう。あそこの川魚は毒を持っていてね。……ワタシが偶然通り掛からなかったら、あんた今頃あの世行きだよ」

むっ……そう言えば少し思い出してきたぞ。

確か魚を食べて苦しかったような……ということはこの婆さんの言うことは本当のことか？

しかし、人に出会えるとは運がいい。これで現状がわかるな。

「そうか。礼をいつてやる。ところで、おまえは誰だ。ここはどこだ。さつさと答えないとぶち殺すぞ？」

「……礼儀がなっていない子供だね。しかもなんて口の聞き方だい！」

「おい、ババア？聞いてんのか？お前は誰だと聞いているんだ！」

「相手に聞く前に自分が名乗るのが礼儀だと知らないのかい！」

ちっ、それぐらいで怒ってんじゃないよ。短気すぎじゃないのか、この婆。

つか……名前か……覚えてねえんだよな。ふむ、偽名でも名乗るか。

うーむ

：

：

：

：

：

：

…はっ！？

これだ！この名前しかない！！！！

「私の名前は、ナナシだ」

「……あんた、舐めてんのかい？」

何！？なめているだと？一生懸命考えた名前だぞ。

「本当のことだ。何だその眼は？人様の名前に文句あんのか？
ああ？」

「はあ……じゃあ家名はなんだい？」

「ネームレスだ！」

「……………」

何だ、婆さん？そんなに私の目を見ないでくれ。……恥ずかしい
じゃないか。

「あんた……もしかして記憶がないのかい？」

「な、何故それを！？」

心を読んだのか！？コイツア驚いた！？

「はあ、厄介な生き物を拾ってしまったよ。それにネーミングセン
ス無さ過ぎだ、この子供は……」

何だ、そのやれやれみたいなポーズは……。

「それよりもお前の名前は何だ。私は答えたんだ。さあ言え！【ごちん！】ぎゃっ！？」

「さっきから年上に対して礼儀がなつてないよ！」

ぐおお、何て力で叩きやがる。コブが出来るじゃないか。いや既に出て来て来てるじゃないか。

ぐおおおお、

ジンジンするう

「……ワタシの名前は　だ」

「あん？頭さすってたから聞いてなかった…もう一回言え「何だつて？」……ってください。お婆様」

恐怖！？そんな目で睨まないでくれよ……それにしても何て目だ。きつと他の人間にも恐れられてんぞ、この婆さん。

てか、この婆さんには逆らわない方がよさそうだな。命がいくつあっても足りないような気がする。

「まあ、いいだろう。ワタシの名前はポーリユシカだ」

……ポーリユシカ……知らない名前だ。

「そしてここはフィオーレ王国にある森の中に作られた私の家だよ」

フィオーレ？

……そんな国、聞いたことないぞ。

どこだ、ここは！？

虚ろ

婆さんに拾われて数ヶ月が経つ。

最初は知らない国で暮らすことは戸惑いも多かったものの、さすが私と言えよう。

たった数ヶ月で大分ここでの暮らしにも慣れてきた。

既に婆さんの家は私の家同然だ。しかし、しかしだ。記憶の方はさっぱりなんだ。

残念ながら全くと言って良いほど、何も思い出すことは出来ないのだ。

思い出すために色々と試行錯誤はやっているんだ。

朝の森林浴は日課だろ。それに昼はベッドでゴロゴロ。夜は瞑想などをしている。そしてご飯は満腹になるまで食べている。

むう……これだけ一生懸命に頑張っているのだが、一向に思い出す気配はない。

くそう！頑張っているのに！どうして！

そんな風に毎日が大変な私である。ちなみに現在は初めて目を覚ました場所。つまり川がある場所で森林浴をしている。

空にはたゆたう雲が流れ、そよそよと吹く風が心地良い。

ああ、記憶を思い出しそうだ。

「……あんだ、働きな……」

「え？」

そんな風にいつも通り頑張っていると、婆さんの声が聞こえた。

「……何だ、幻聴か……」

「もう一度言っよ。あんだ働きな」

「はい？」

どうやら幻聴ではなかったようだ。私の視界には無表情で何やら目つきが怖い婆さんがいた。

…

…

…

爛々と太陽が照り、雲がたゆたう朝の時間。

フィオーレ王国にある東の森にはナナシとポーリユシカがいた。

「……なんだ幻覚か……」

虚ろな目で空を見上げていたナナシは、ポーリユシカを見てそう
呟くと再び空を見上げ始めた。

それを無言で見っていたポーリユシカはつかつかと歩み寄り拳を握
ると

「痛っ!?!」

ナナシに向けて振り下ろした。

「あにすんだ! ババア!」

涙目で叩かれた頭を抑えているナナシは口を開くが

「毎日、毎日、グータラグータラ!少しは働いたらどうなんだい!」

「馬鹿やろう！私は記憶を思い出そうと頑張っているんだよ！見てみるよ、この気合いの入った目を！」

「……虚ろだね。あんたは記憶喪失を逆手に取って働きたくないだけだよ。言い訳はいいから来な！」

「違っ！？本当に記憶を思い出そうとお！痛い痛い痛いっ！？やめて！」

小柄な体であるナナシは抵抗らしい抵抗も出来ずにポーリュシカに引きずられて森の奥へと消えてしまった。

その後、とある木の家では

「嫌でござる。働きたくないでござる。」

「駄々をこねるんじゃない！さっさと薬草を集めて来な！」

と言う会話が あったと かなかったとか。

認識

「数か月後」

「だあ！薬草なんぞ知るか！見付けれる訳がねえだろうが！」

とある日の午後。分厚い本を片手に森の中を歩くナナシの姿があった。

「円月草だあ！？んなもん。どこにもねえじゃねえか！くそが！」

開かれたページには、薬草らしき絵と説明が書いてある。どうやら、それを見ながら薬草を探しているようだ。

「大体、私には記憶を思い出すと言う使命があつてだな。こんなことをしてる場合では……」

ぶつくさと文句を言いながら探すナナシであったが、一向に目的の薬草は見つからなかったのである。

「ダメだ……今日は諦めよう。適当に嘘付けばバレねえだろ」

…

…

…

あゝはいはい。薬草なんて見つかりませんでした。

大体、薬草の知識なんざないんだよ。こんな絵が書かれた本だけで探すのは無理だっつーの。

まったく、あの婆め！

帰ったら満腹になるまで飯を食ってやるからな。見てろよ、肉を食っ……ん？ 誰だ、アイツ。

私が婆さんの愚痴などを呟きながら歩いていると、婆さん家の前に誰かいた。

……白髪に身長は私より低い、年老いた老人だ……。

誰だアイツは？こんな森の奥で婆さん以外の人間は見るのは初めてだ。

婆さんは人間嫌いらしいからな。あまりと言うか全くと言って人間と接しないのだ。

ん？あれ？そう言えば私は大丈夫なのか？

もしかして私は人間と認知されていないのか！？

ひ、ひでえ。

……だから穀潰しだの。グータラだの。ズボラだの、言われるんだな……。

くそう、私を人間と認めさせてやる！

そのためにも何か人間として確立していることを実証しなければ！

「はっしょん！」

む……思考が逸れていた。ジジイのクシャミのおかげで現実に戻れたようだな。

ふむ……ところであのジジイは誰だ？

婆さんに友がいるのは有り得ない。また婆さんを訪問するのも有り得ないだろ。

人間との触れ合いは街の店員とかぐらいしか……。

……ま、まさか、婆さんのストーカーか！？

さっきも言ったように婆さんも時々、街に買い物に出るからな。そう言うことは無いとは言えない。

こ、コイツァ、特ダネだよ！ストーカーなんて初めて見たぞ！

むっ？よく考えると、これはチャンスではないか？

そうさ！あの怪しいジジイを倒せばいいんだ！そうすれば婆さんも私に感謝して薬草探しをさせなくなる。

うむ、そうと決まれば即実行だ。

ふっふっふ、私は接近戦が得意なのだ。気絶させてボコボコにしてやんよ。

【転影移！】

そう小さく呟き、自分の影に沈むとストーカージジイの影へと転移した。

∴

∴

∴

影へと潜ったナナシは老人の影からぐぷりと姿を現した。一方、小柄な老人はナナシが姿を現したことに気付いていない。

どうやら気配を感じ取ることができないぐらいにナナシの隠密性は高いようだ。

小柄な老人は終始、鼻水が垂れてくる鼻を嚙っている。どうやら風邪を引いているらしい。これも気付くことが出来ない要因の一つだろう。

一方、ナナシは影から鈍色な光るナイフを取り出すと、柄の部分を躊躇なく小柄な老人に向けて横薙ぎした。

（気絶しろ）

その行為は淀みなく、小柄な老人の首筋に向かっていったが

「マスター危ない！」

「むっ？おおっ！？」

もう少しで首筋に達しようとした時、どこからか少女の痞高い声が響き、小柄な老人はナイフを寸前で避けることが出来た。

「ちっ」

避けられたことに舌打ちをしたナナシは、後方に下がろうとするが

「あ？」

背後から接近した誰かが剣を振り下ろしていることに気付き、そのまま振り返ることなく

「マスターを狙った曲者が！」

【ガキン！】

急いで影から出し、もう片方の手に持ったナイフで受け止めた。

ガチガチと銀色に輝く剣と鈍色に光るナイフの鏝迫り合う音が響く。

（前にはジジイ。後ろには……）

瞬時に頭を回転させ状況を理解したナナシは、

「ふっ」

小さく息を吐いて力を抜き、鏑迫り合いに負けたように見せ掛け

「おら！」

再び体を半回転させながら、勢い良く腕を振り剣を弾き返した。

ガキンっ！という疇高い音が響く。ナナシは鏑迫り合いを征したが、油断することなく体勢を取りながら睨む。

「…………ガキだと…………」

そこにはセミロングの赤髪の少女が居た。髪は三つ編みにしている。

そして上半身に鎧を付け、下半身にはスカートを纏っていた。

また少女は弾かれた剣をなんとか握っているが、手が痺れているのか苦悶の表情を浮かべていた。

「エルザ！」

マスターと呼ばれた老人は少女の名前を言い、お返しとばかりに、少女エルザは

「ここはお任せを！マスターを狙った不届きものは私が排除します
！」

そう言い、弾かれたことによって崩れた体勢を立て直しながらナシに剣を向けた。

エルザ vs ナナシ

対峙するナナシとエルザの二人であったが、対峙する時に流れる特有の静けさが漂う前に

「あ？不届き者だと？ふざけんじゃねえ！ここは私の家だぞ。不審者が！」

そう叫んだナナシによって戦いは始められた。ナナシは腰を落とし、素早く動きながらエルザに襲い掛かる。

「おらよ！」

「くっ！？」

左手で刃渡り15センチほどのナイフを振るい、刺し、時には薙ぐ。

その度にエルザも同様に払い、穿ち、時には避ける。

「はあ！」

「おらっ！」

エルザが振るえば、ナナシも振るう。その逆もしかり。

ガキンと何度も打ち合い時折、火花が迸りながら戦いは熾烈を窮め始めた。

（ちっ、拉致があかないな）

だが、まだ序盤であるにも関わらず、勝負が着かないことにイライラし始めたナナシは新たに動き出した。

「しっ！」

一度打ち合いを止めると、後方に下がりながら、素早く右手に持ったナイフを投げたのだ。

ナイフの軌跡は真っ直ぐエルザに吸い込まれるように向かってくる。

「むっ」

エルザは突如、飛来して来たナイフを剣で弾き飛ばす。そして再びナナシに接近しようとした時

「おせえよ！不審者！」

【影槍！】

「なっ！？」

ナナシがそう唱えるとエルザの足元に出来た影から漆黒の槍が飛び出した。

【ガギッ】

すると、すぐに何かがぶつかり合う鈍く小さな音がした。

「し、しまった！？剣が！？」

それはエルザの剣が根元から砕け壊れた音だった。

影から飛び出した鋭く尖った槍が剣の柄を貫き、刃と柄を切り離したのだ。

それを見たナナシは勝負が着いたと感じたのだろう。

不敵に笑い、器用にナイフをくるくると回しながら喋り掛ける。

「格好、装備からして、お前は剣士だよな。剣無き剣士は何が出来る？」

「何？」

「降参した方が身のためだぞ。不審者が！」

そう言い再び襲い掛かろうとするが

「フェアリーテイルの魔導士を舐めるな！」

【喚装！】

そうエルザが唱えると、虚空からすうと一本の剣が出てきた。

先程エルザが持っていた剣と全く同じものだ。それを素早く掴んだエルザは剣を振るった。

「はぁ！」

「魔導士だ！？？」

余裕を出し笑みを浮かべたまま接近していたナナシは、剣を虚空から出したエルザに驚き、反応が遅れ攻撃を許してしまった。

「ちい!？」

ギリギリで避けるものの何本か切り取られた髪がはらりと舞い落ちる。

(あ、危なっ!?)

額に汗を欠いたナナシはエルザに喋りながら睨み付けようとする。

「まさか魔導士だったとは思わなかつ「ふん!」「ぎゃぴっ!?!」

だが、エルザはナナシの言葉を聞くことなく、剣の柄で頭を叩き、
いとも簡単に気絶させた。

「……………あー……………」

地面に倒れたナナシはピクピクと動いているが、一時の間は目を覚ますことはないだろう。

何とも呆気ない結末の戦いであった。

「全く、手こずらせて」「

「何者かの？ズズッ」

今までエルザ対ナナシを傍観していた老人は鼻を嚙りながら近づく。

「分かりません。ただマスターを狙ったことだけは判明しています」
「うゝむ」

風邪の為だろう。顔を赤くさせ鼻水を垂らしながら悩む老人だったが、

「あつそう言えば……ここは自分の家だと言っていました。しかしここはポーリユシカさんの家のはずです」

（うむう、自分の家？ポーリユシカの？……まさかの……）

ふと、エルザが思い出した内容に老人が思考しようとした時

「人ん家の前でドンパチとは度胸があるね。マカロフ」

木で出来た家から扉を開けてポーリユシカが出て来た。

その顔は非常に不機嫌そうに歪められている。その姿に老人マカロフは冷や汗を流す。

「よ、よお。久しぶりじゃな、ポーリュシカ。実はの、この小僧が……」

「その子は私の預かり子だよ。全く、バカな子なんだから。バカに付ける薬はないからね。そのまま寝かしときな」

「ほう、お主が子を世話とはのう。いやいやまさか……のう？」

「……あんたも風邪を引いてバカになったようだね。早く入りな！ 風邪なんかで死にたいのかい！」

何か含みのある言い方をしたマカロフに、片眉を上げたポーリュシカはそれだけを言う。

そして扉を開けたままイラついたように歩き、家の中へと入っていった。その背中では言葉通り、早く来いと語りかけているようだ。

対してマカロフは

「そ、そゝ怒るな。待つのだじゃ、ポーリュシカ！ おお、エルザよ、その子を頼むぞおゝ」

「は、はい」

慌てながらポーリユシカを宥める言葉を発した後、隣に佇んでいたエルザにナナシのことを頼むと家へと入っていく。

「全く、どうして私が……」

残されたエルザは、はあと溜め息を吐いた。

「あれぐらいで気絶するとは……全く……世話が掛かる奴のようだな……」

気絶したナナシの顔を見ながらそう呟く。そして、まだ少し痺れる手でナナシの足を掴み、ズリズリと引っ張りながら家へと入っていった。

記憶

現在は陽が沈み掛け、茜色に空が染まり始めた時間である。

小一時間前に自室で意識を取り戻した私は、すぐに起き上がり、婆さんが無事か確認しに走った。

痛む頭と体を抑えて……。

すると、すぐに無事な姿の婆さんを発見したのだ。何とか飯は食えるようだ、よかった。

……しかし安心した束の間……。

『そこに座りな。正座だよ』

『ええー』

すぐに婆さんから事情の説明と有り難くない説教を頂戴したのだよ。

理不尽だ！と思いつつも話を聞いてやっていると色々と情報を収集することが出来た。

その中で一番驚いたのは、ストーカー爺さんが婆さんと旧知の仲であると言ったことだ。

まさか、婆さんに友が居たとは……。私にとっては驚きの何モノでもなく、何度も聞き返していたら叩かれてしまった。

しかし叩くのは酷くないか！　ちょっと10回ほど聞き返しただけではないか！

全く、あの婆さんは短気なんだから、困ったものだよ。

おっと、話が逸れていたな。

ストーカー爺さんの名前はマカロフ・ドレーアと言う。

何か偉い人なんだとよ。確か……フェアリーテイルだったかな？
その魔導士ギルドのマスターだそうだ。

魔導士ギルドとは魔導士達の集まる組合で魔導士に仕事や情報を仲介する場所らしい。

まあ私には何の関係も縁もない場所なのは明白だな。

ちなみに、忌々しいが私を接近戦で倒した女は、フェアリーテイルに所属する魔導士だそうだ。

女の名前はエルザ・スカーレット。年は12歳。

爺さん曰わく将来が楽しみな人物らしい。

そして爺さん達の話聞いた後、私も自己紹介してやったのだが、

『偽名か？』

と、二人同時に言いやがった！

偽名じゃねえやい！ 本当の名前だ！ 何て失礼な奴らだ！ 確かに考えた時は偽名だったけど今は違う！

心で叫びつつ婆さんも何か言ってやれよ。と話を振ったらネーミングセンスがないだの。

普段からグータラしてるからだとか、何故か説教が再開してしまった。

全く持つて意味が分からない。何故あそこから説教に行くんだよ？

私の名前は分かりやすく最高じゃないか。

婆さんこそネーミングセンスがないのではないか。世の中、間違っていると思う！

「聞いているのかい！」

おっと、まだ婆さんの説教は続いていたのだった。

「ちゃんと聞いてたっつーの！」

「……本当かい？……」

「当たり前だろうが！」

私がそう答えると婆さんは訝しげに此方を見てくる。全く、失礼な婆さんだ。

「……じゃあ、今までのように散発的じゃなくて、明日から毎日、薬草採集をしてもらうからね」

「聞いてないぞ！？あぶんっ！？」

「やっぱり聞いてないんじゃないのさ！それに今日頼んだ薬草はどうしたんだい！」

「しょ、しよれは」

婆さんの口から信じられない言葉が飛び出し、驚愕の声を上げると、ビンタされてしまった。

い、痛くてマトモに喋れない。

「どうせ見つけ切れなかったんだろっ？今すぐ探してきな！」

「ちょっ、わたひのはなひを」

「言いかい。見つけてくるまで戻ってくるんじゃないよ」

「きひてく……おひゃっ……」

言い終わった婆さんは私の言い訳を聞く前に首根っこを掴むと、外へと放り投げやがった！

「いきなりひやにすんだ【ボタン】……よ……」

抗議の声を上げるも、その前に扉はぴしゃりと閉められた。

てか今から薬草採集だと！？

待て待て待て、今は夕方だぞ！　もう暗くなっているのに見つけれ
るわけがないじゃないか！？

…

…

…

ナナシを外に投げたポーリュシカは溜め息を吐きながら椅子に腰を降ろす。

「面白い子じゃの」

「何が面白いもんさ。毎日、あの調子だよ。子供のお守りは大変さね」

呆れた表情で対面に座ったマカロフにそう答えるとテーブルに置いてある紅茶を啜る。

マカロフは今だに鼻水を啜っていることから、風邪はすぐに治らないようだ。

「大変ならウチのギルドで預かってもらいぞ？」

「駄目だね」

「ん？何故じゃ？」

「あの子は実質、生まれて数ヶ月しか経っていないんだ。言動もしつかりしていないから大衆の中は無理さ。最近ようやく、人間として安定してきたんだ。自分のことも考え始めたしね。だから、あと一年はじっくり育てる必要があるよ」

「しかし、お主と森の中だけじゃったら成長はあまりせんじゃろ？」

年は大体、エルザ達と同じ頃じゃろうから同世代と居させた方がよくないかの？」

「……私はギルドに入れるのは反対だよ。……まあ、あの子の意思次第だがね」

そうポーリユシカとマカロフが話す間にも

『開けるー！ 横暴だあ！』

ドンドンと扉を叩く音が聞こえてきていた。どうやらナナシは薬草採集に出掛けずに抗議をしているようだ。

そんな喧しい音や声を聞いて、席を離れていたエルザが帰ってきた。そしてエルザは眉を寄せながら尋ねる。

「うるさい奴だな。あの……ところでポーリユシカさん……」

「ん？ どうしたんだい？」

「ナナシと言う名前は本当なのでしょうか？」

「残念ながら本当さ」

「……信じられません……」

「信じようが信じまいが、あの子がそう名乗ったんだ。あの子はナシ・ネームレスだよ」

「……自分で名乗った……」

その言葉に疑問を感じたエルザは、頭を悩ましながら考えると、一つの答えを導き出したようだ。

「もしかして自分の名前が分からない？ 記憶喪失ですか？」

「さあね。それはあの子に自分で聞くといいさ。それとついでにあの子の友になつてくれると有り難いね」

「友……ですか？」

「知り合いは私しかないからね。かと言って自分から友を作るよな子じゃないからね。どうだい？」

「知り合いが一人しか居ないのは可哀想ですね。分かりました！ マスター、少し席を外します」

「おお、行ってくるがよい」

ポーリュシカから頼まれたエルザは気合を入れながら扉へと向かう。

「ん？」

しかし、ドアノブを握った所で何かに気付いた。

さっきまで聞こえていたナナシの声と扉を叩く音が聞こえないのだ。しかも人の気配が全くない。

「諦めて採集に行ってしまったのか。早くいかねば見失ってしまう！」

そのことに気付いたエルザは慌てて扉を開け外へと飛び出して行った。

「ギルドには入れないよ。でも友は作った方がいいからね。あの子にとっては押し付けがましいけど、これでいいだろう？」

「たぶんの。エルザなら今日中に良き友になってくれるじゃろう。儂が保証するぞ」

「……まあ、あの子を見付けることが出来るならの話だがね……」

「むっ？」

何か含みのある言い方にマカロフは疑問を感じた。

だがポーリユシカが指差す方向を見ると、すぐに答えを見つけたようだ。

「……………」

ポーリユシカの指先は床が示されており、その床には人影が出来ていた。

その不自然で不気味な人影はゆっくりと動き、部屋の奥へと進んでいた。

「あんた、薬草採集は終わったのかい？」

【ビクッ】

その人影にポーリユシカが尋ねると、ぐにやりと人影が揺れる。

「採集して来なかったら、当分の間は晩ご飯抜きだからね」

そう言われた瞬間

『ナントコッタイ！？』

そう声を出すと人影は慌てたように扉を抜け、外へ飛び出していた。

「風邪を引いてるとは言え僕も気付かんとは……恐ろしいほどの隠密性じゃな。先程の奇襲と言い、一体何者だったんじゃ？子供にしては手慣れすぎておる」

「……さあね……。私には、ただの子供にしか見えないね」

啞然としながらズズツと鼻水を啜るマカロフと、静かに紅茶を飲むポーリュシ力であった。

…

…

…

ちくしょう！

せつかく影に潜り、こっそりと自室に帰るという計画を取っていたのに見つかるとは……相変わらず勘が良い婆さんだよ。

それにしても脅しは横暴だと思う。ましてや晩飯抜きなど残酷にもほどがある！

って、それより早く薬草を見付けねば、暗くなってしまうっ！？
急げ急げ急げ！

それから数十分、影の中から取り出した本を片手に探し回ったが、
円月草を見つけることは出来なかった。

何故だ！ 本に書いてある通りの薬草なんぞ、どこにもないぞ！
それに似た形の雑草ならあったが……。

どこだ！ 円月草お！

「むっ。やっと見つけたぞ！ナナシ！」

「……………」

その時、ガサゴソと音がすると、茂みの中から野生の魔物が姿を現した。

魔物のくせに髪は赤いわ、鎧は着けてるわで、初めて見るな。どうやら新種の赤い魔物のようだ。

「おい！聞いているのか！」

こついつ時は無視が一番である。目を合わせたらダメだ。さつさと円月草を探そう。

「円月草やあゝい。出てきておくぐべし！？」

「聞いているのかと言っているんだ！」

ちよっ、いきなりビンタだと！？

今日、初めて会ったばかりの人にそれは酷くないか！？

「クソアマ！いきなり何しやがる！？」

「私の名前はクソアマではない。エルザだ。さつき家で教えただろうが……」

「えるざ？誰だお前？魔獣エルザんの間違いではないのかあ？」

「記憶障害がここまで酷いとは……全く、しょうがない奴のようだな……思い出させてやろう」

ん？ 何だよ？ 戦闘準備だと？

おもしれえ！ 私だって女に負けるのは悔しかったんだ。次はボコボコにしてやんよ！

：

：

：

「私は誰だ？」

「え、エルザ様です」

「ちゃんと理解したようだな。ああ、様は付けなくていいぞ。」

「は、はい！」

「それにしても搜したんだぞ」

「硬っ！？」

はっ！？ 今まで何を？

てか、私はエルザ様……ではなく、エルザに抱き寄せられているではないか。何だ、この状況は？

それにしても上半身に装備している鎧が頭に当たって痛い。自宅前の戦闘で怪我した所に当たって非常に痛い。二度攻めかあ！

「痛っ。ちよっ、離せよ！」

「むっ……ああ、いいだろう。それよりも頭は大丈夫か？記憶は思い出しそうか？」

私を離れたエルザは心配そうな態度で語りかけてくる。

てか記憶喪失だと誰が喋ったんだ！？ 婆さんか？ 余計なことをしやがって

「おい、聞いているのか？ 今日から私達は友だからな。困っていることがあったら私を頼るといい」

何だ、コイツ。私達は今日初めて会ったんだぞ？いきなり友ってなんだよ。

て、てか何だよ、その心配していますみたいな目は！？

…

…

…

エルザが心配そうに見てくる様子に、調子を崩されたナナシはガリガリと頭を掻く。

「いや、お前に心配される筋合いはないんだが……てか友ってなんだよ？」

「記憶がないというのは大変だろう？ それにポーリユシカさんに聞いたぞ。一人で寂しかったそうだな」

「いや、別に……」

「辛かったな。悲しかったな。もう私がいるから大丈夫だ」

「何の話だ？」

どうやらエルザの頭の中では、ナナシに記憶喪失かどうか聞く前に答えが出ていたらしい。

ナナシを捜す間に色々と妄想してしまったようで、既にエルザの目には記憶喪失者ナナシとして写っていた。

それにプラスして友が居ない寂しさに囚われている少年としても写っている。

どうやらエルザの頭の中で、かなり話が飛躍してしまったようだ。

「私達が出会ったのも何かの縁だ。記憶を取り戻すことに協力しようと思つてな」

エルザは胸を張りながらそう言つと

「これで頭を叩けば思い出すのではないか？いやこれか？いやいやこれだろう」

次々に武器を虚空から出現させて始めた。それを見ていたナナシは

「……こ、殺される……」

身の危険を感じ、顔を真っ青にすると、ガタガタと震え始めていた。

先程あつた、しかしナナシは覚えていない戦闘の前に、悔しいと憤つていた姿は微塵も感じない。

いや、戦闘でよっぽのことがあつたのだろう。既にナナシは悔しいさを忘れ、むしろエルザに怯えているようだ。

ナナシが無意識に怯えていると、嬉しそうに微笑んでいるエルザは一振りの巨大なハンマーを手に取る。

「うむ、まずはこのハンマーで、ふん！」

そして躊躇なく目の前にいるナナシに目掛けて振り下ろした。

【バゴンッ！】「危なっ！？」

ナナシは当たる寸前に、ギリギリ回避し転がる。元の場所を見ると、見事に地面は凹んでいた。

「……………無茶苦茶だ……………」

「逃げるな！」

「逃げるな！じゃねえよ！殺す気か！それに頭を叩いて記憶が戻るわけがないだろうが！」

「大丈夫だ。これは魔法剣の一種だからな。頭に衝撃を与えるだけだ」

「死ぬよ！？」

「そうか？グレイは大丈夫だったぞ？」

キョトンとして聞いてくるエルザにナナシは深く溜め息を吐く。

「グレイとやらが誰かは知らないが、止めてくれ」

「むう、仕方ないな」

「まずは落ち着け。大体、本音を言つとだな。私はな、無理矢理、記憶を思い出そうとは思っていないぞ」

「何故だ？ 大切な記憶があるかもしれないのだぞ！」

「今の私はナナシだ。記憶なんぞ、何時か思い出すさ」

エルザの痾高い声上がり、それに耳を抑えた後、ナナシはぶっきらぼうに答えていた。

「お前は自分が何者か知りたくないのか？」

「私はナナシなんだ。ナナシ・ネームレスという一人の人間なんだよ」

「意味が分からないぞ！」

「分からなくて結構」

それから何度も押し問答があつたが、

「分かった。お前が言うんだ。仕方ない」

結局、溜め息を吐いたエルザが折れ、ナナシの記憶のことは以後、口出しをしなくなったのである。

「だが、記憶関係じゃなくても困ったことがあつたら私を頼れ。いいな？」

「ん？ いいのか？」

「当たり前だ。困つたら何時でも頼ってくれて構わない。なんせ私達は今日から友だからな」

「友……何時でも頼っていい奴のことなんだよな。分かった。覚えておこう」

「うむ、今日からよろしくな」

「ああ、よろしく」

その返答にエルザは満足げに頷いていると、ナナシが分厚い本を差し出してきて喋り出す。

「ではさっそく。エルザよ、薬草を探せ。円月草だ。いいな？」

「……何？……」

「私は薬草を見つけきれなくて困っているんだ。早く探してこい。あーあと、腹が減った。果物を取ってこい。それに……」

エルザに本を押し付けているナナシは、友のことをパシリか何かと認識していたようだ。

先程の怯えは何のことやら、ナナシは調子に乗り喋り続けたが、その勢いはすぐに止まることとなる。

「明日から私の代わりに薬草を採集しろ。おおそう言えば肩がだるいな。友よ、肩を揉おわっ！？」

「お前は友と言う言葉を履き違えているようだな。友になる前に教育が必要のようだ。来い！エルザ先生がみっちり教えてやる！！！」

「痛い痛い痛い！？なして！？」

ナナシの言葉に怒りで肩を震わせていたエルザは、ナナシの首根っこを力強く掴む。

「こら！大人しくしろ！」

そして抵抗するナナシを引きずり森の奥へと消えていったのであった。

その後

「只今戻りました」

「友は対等な関係、対等な……」

すつきりとした笑顔のエルザと顔面蒼白で円月草片手に、ぶつぶつと呟いているナナシが帰ってきたそう。

「ああ、ナナシ。これから毎週、私が休みの日はレッスンだからな。みっちりお前を鍛えてやる」

「ひい!？」

記憶（後書き）

今まで、ナナシが記憶を思い出したいと言っていたのは、ナナシが仕事から逃げる口実でした。今回のが本音です。

年齢

現在は夜である。

何とか円月草を採取して来た私は無事に夕食を食べることが出来た。

その夕飯中に爺さんから聞いて驚いたのだが、婆さんは何と高位の治癒魔導士らしい。

ただの薬草大好き婆さんではなかったようだ。まさか、こんな近くに魔導士がいたとは……。

ちなみに、今は夕食も食べ終わりソファーでゆったりとしている。

私の後ろには椅子に座っている爺さんとエルザがいる。何でも今夜は泊まっていくんだと。

婆さんは人間嫌いのはずなのだが……と夕食中に疑問に思っていた所、爺さんが囁き声で教えてくれた。

どうやら病人には比較的優しいらしい。

ちなみに、別室で今も婆さんは爺さん用の薬を作ってるため嘘ではないだろう。

ふむ、病人には優しいとは新事実だ。そしてよくよく考えてみる。

人間である私がここで生活出来るということはだな。

……つまり、つまりだ。婆さんにとって私は病人なのだ……

「ナナシよ。少し尋ねたいことがあるのじゃが……」

信じられない！？ 私は病人ではないぞ！

もしかして記憶喪失のことが病気なのか？

しかし婆さんには散々言っただろ。私自身は記憶喪失ではないと……。

ちゃんと理解してくれていたはずだったんだが……それでも私は病人と見られているのだろうか？

「ナナシ！って聞いておらんの」

「マスター、私がしましょうか？ ナナシの扱いは大分理解したつもりです」

「……早いう。まだ会って1日も経っておらんぞ？」

「意外に単純な性格でしたので」

「それよりさっきから何をしておるんじゃ？」

「ナナシの教育を明日から行うので計画書を書いています！」

「さつき、ポリュシカから頼まれたやつか」

「はい。どうせ私も勉強しないといけませんので、そのついでに教えていこうかと」

後で、婆さんにすっかり私のことを伝えておこう。

だが今、動くのは嫌だ。今日の疲れを癒しているからな。

今日は婆さんと出会った時並みに忙しかったのだ。久しぶりに活動した日と言えよう。

まあ、こんなにゆったりとして居られるのは、エルザが薬草採取に協力してくれたおかげだ。

エルザの助言のおかげで薬草を見つけることができたからな。居なかったら今日はヤバかったかもしれない。

ちなみに、円月草に似た雑草がまさにそれだったのだよ。

あれは驚いたな。本当にエルザには感謝しないといけないな。

ただ、エルザ先生の授業は今夜限りで終わりにして欲しい。あの授業はスパルタすぎる。

こっ、ずばーん！ と凄く大変だったのだ。

ずばーんだぞ！ ずばーん。

そしてずどーんだ。

「聞いておるか！ ナナシ！」

こっ、ずどーんって

「ナナシ！！！」

むっ？ 背後にいた爺さんが何やら話し掛けてきたぞ。

「うるさいな。声のトーンを落とせ。婆さんに怒られるぞ」

「ようやく気づきおったか」

呼ばれたので振り返ってみると、案の定、爺さんが此方を見ている。

だが呆れ果てたような顔だ。

ふむ……自分の風邪ひき具合に呆れ果てているのだろう。

まあジジイだからな。風邪でぼっくり逝く可能性もあるし、風邪を引いたことを反省しているのか。

さて、そんな爺さんよりも気になったのは視界の端に写るエルザの方だ。

「むう。ポーリュシカさんから渡される本の量から……やはりナナシには毎日勉強させないといけないようだな」

エルザは真剣な顔で何やら呟いている。

しかし初めてしっかりと顔を見たな。意外に真面目な顔は凛々しくて可愛い……。

はっ！？ 私は何を馬鹿なことを考えているんだ。

あれを可愛いとは私の目は腐っているんじゃないのか！？

そんなことを思考しながら立ち上がってエルザを試してみる。

どうやらエルザはテーブルに大きな紙を広げて何やら書いているようだ。

何だか悪い予感がするのは気のせいだろうか。

「お主は何歳じゃ？」

おっと、爺さんと話していたのだったな。

ふむ、年齢か。しいて言うなれば一才にも達していない。

しかしまあ、爺さんにあのことを言っても意味はないので……確かエルザが12歳だったか。ならば私は

「24歳だ」

「何だと！？有り得ないぞ！」

むっ。何でエルザが話に入ってくるんだ。しかも何だ、その驚いた顔は？

「私より身長が低いじゃないか！」

「何言ってるんだ。私は24歳だ。てか身長で決めてんじゃないぞ！」

「いや有り得ない」

何て失礼な奴だ。確かに私の身長はエルザより低い。

しかし、しかしだ。私も成長している。この数ヶ月で130を越えたんだ。エルザなんぞ、すぐに追い抜いてやる！

だから年齢はエルザより二倍の24歳で問題ないはずだ！

「お前は どう見ても私より年下だ！」

「馬鹿野郎！ 私 は 24 歳 だ！」

「ナナシよ。お主はせいぜい8〜12歳が限界じゃぞ。24歳はちよつとのう」

ジジイもか！？呆れた顔で此方を見るな！てか

「エルザより年が低いわけがないじゃないか。私をバカにしないでくれよ……」

「何だと！？」

「その自信は一体どこから来るのか不思議じゃのう」

⋮

⋮

⋮

その後も売り言葉に買い言葉が続き、言い争いは熾烈を極めた。

何故か意固地になったナナシとエルザが考えを改めることはなかったからだ。

「何の騒ぎだい！」

「おお、ポーリュシカ」

だが、薬の調合からポーリュシカが帰ってくると状況は一転した。

「婆さん、聞いてくれよ。私は24歳だよな？」

「いえ、ナナシは私と同じ12歳か、それより下です！そうですよね？」

新たにやってきた訪問者に近づき、絶対の自信を持って喋り掛けるナナシとエルザ。

だが額をピクピクと震わせていたポーリュシカは二人を冷たい目で見る。

「「「ひっ！？」」」

その目を向けられた二人と何故かマカロフまでも小さく悲鳴をあげる。

まるで蛇に睨まれた蛙のようだ。

「一体、何時だと思っているんだい！」

そう言い放つと躊躇することなく、拳を握った状態でナナシとエルザの頭を叩いた。

「……痛い……」

「夜遅いのに騒ぐんじゃない！」

「ちげえよ。騒いでるんじゃない。私の年齢をだな……」

「あんたは12歳で決定だ。反論は認めないよ」

「そんなあ!？」

「それよりもあんたは風呂を掃除してきな！」

「理不尽だあ」

結局、ポーリユシカの言葉でナナシの年齢は決まってしまった。

反抗すれば、ご飯抜きが待っていると理解したナナシは逆らえず、落胆しながら風呂場に向かっていく。

「……私は12歳なのか……」

「やはりな。今回の勝負も私の勝ちのようだ。ふふっ」

一方、エルザは腕を組み、ナナシを見て不敵に笑っていた。

だが

「あんたの方は終わったのかい？」

「……まだです……」

ポーリユシカの矛先がエルザに向かうと、タジタジと言葉を喋るだけ。

どうやらエルザもポーリユシカは怖いようだ。

「だったら早くおし。あんたがしたいって言いだしたんだよ」

「さ、早急に終わらせます！」

そう言つと、急いで椅子に座りテーブルにある紙と睨めっこし始めた。

「さすがはポーリユシカじゃな……恐ろしのう……」

そんな一部始終を見ていたマカロフがそう呟く。

だが、まさか自分にも矛先が来るとは考えていなかったのである。

「何、ポケットとしてんだい。マカロフ？」

「わ、儂か！？ 儂は何もしておらんぞ！？」

「何もしてないのが問題さ。あんたが居たのにどうしてこの子達が騒いでいるんだい？ ちよつと来な！」

「や、やめっ！？」

ポーリユシカに襟首を掴まれたマカロフは、ナナシのように引きずられ部屋の奥へと消えた。

「マスター、ご愁傷様です」

リビングではそう言いつつも、ペン片手に手を動かすエルザが居たとか。

喪失者（前書き）

今回は読みにくいと思います。

喪失者

風呂掃除完了だ！

後はお湯を蛇口から出して待つだけだな。白銀色の蛇口を捻ると勢い良くお湯が出てきた。

木製の浴槽にリズミカルな音を鳴らしながらお湯が溜まっていく。それと共に蒸気が舞い上がり、広い浴室に湯気が立ち込め始めた。うむ、湯気で前が見えない。さっさと別室に移動しよう。

ちなみに、ここの湯の元は温泉だ。源泉を引いて、直接お湯として使っているため非常に熱い。

だから入るときには注意が必要だ。水を足さなかったら死んでしまっからな。

さて、そんなことより早く自室に帰って瞑想するか。

「むっ。やっと出てきた。遅いぞ」

「お前、何やってんだ？」

浴室から出ると、そこにはエルザが佇んでいた。腕を組み、何やら嬉しそうに微笑んだ顔で喋り掛けてくる。

「ふふん　１日だけが完成したんだ」

微笑む顔が少しだけ可愛いなと思ってしまったが、コイツの笑顔は恐ろしいことの前触れのような気がするな。

「完成？　何の話だよ？」

「明日からの勉強の話だ！」

「勉強？　何だそれ。お前のレッスンなら来週だろ？　（来週は森の奥に逃げよう）」

「私のレッスンとは違う物だ。夕飯時、ポーリユシカさんの話を聞いていなかったのか？」

私の返答に対してエルザは微笑みから一転し、憐れみを浮かべたような目で此方を見ってくる。何て失礼な奴だ。

「勿論、聞いていたさ」

「嘘だな」

「聞いていました！」

「じゃあ、ポーリユシカさんが何を言ったのか言ってみろ」

そ、そこまで聞いてくるのか。夕飯時、夕飯時……確か婆さんは……ああ思い出したぞ。

「風邪を引いてしまった爺さんを怒っていた！どうだ、覚えていた
だろ？」

「……確かにそうだが、それはナナシには関係ない話だ」

そう言うや否や、エルザは溜め息を吐く

（やっぱりコイツは1人には出来んな。人の話は聞かない。薬草採取も適当。戦闘も弱い。ふむ……ダメダメではないか！？ 鍛えねばすぐに死ぬぞ！？）

「私と出会えてよかったな。明日から一緒に頑張ろう」

何を言ってるんだ。話が見えない……てか肩に手をおくな！ 何か子供扱いされていないか？

私とお前は同い年に決まったのだぞ！

「ではナナシ。明日から始まる計画の概要だけ説明してやるう」

⋮

⋮

⋮

ナナシ教育計画だと！？ あの婆さん！ ふざけたことを始めやがった！

何でも一年間、薬学や魔法などの勉強をしないとイケないらしい。
私が婆さん無しでも生きれるようにするための措置らしい。

エルザに聞いても、らしいらしいで、よく分からないので婆さんに直接聞くしかない。

と言うことで私は婆さんの私室を訪ねるところだ。

「婆さん！ どういうことだ！」

婆さんがいる私室まで急ぎ、ノックもせず扉を開けた。

「待て、ナナシ！」

背後からエルザが付いてくるが、部屋に入らせないために扉を無理矢理閉める。

『むっ！ 閉めるな！ 私も……』

何やら声が聞こえてくるが、それよりも婆さんと話をしないといけないのだ。

部屋の中には婆さんが一人で作業をしている。薬でも作っているのだろう。

「どういうことだよ！ 私は勉強なんてしたくないぞ！」

「ピーチクパーチクうるさい子だね」

婆さんはうんざりとした表情と態度を隠そうともせず、私の方へと振り返る。

「それじゃあ聞くよ？ あんたは何かしたいことはあるかい？」

「……………」

私はピタリと腕を止めた。何故腕を止めたのか、自分では分からない。

ただ固まっている私に婆さんは続ける。

「この世界に、この時代に生きているのなら何をしたいのかと聞いているんだよ。毎日寝て食ってグータラしているあんたは何をしたいんだい？」

「……………飯を食いたい……………」

「それはすることがそれしかないからさ。食事以外に何かしたいことはあるかい？ ああ……………グータラな行動は却下だよ」

「むう」

何をしたい？ いきなり、そんなの聞かれても分からねえよ。

食事は好きだ。グータラするのも好きだ。しかし婆さんは、それは駄目だという。

ならば、それ以外に私は何をしたい？

…

…

…

うゝむ

何かしたいこと？

しいて言うならば私は生きたい。ただ、ナナシ・ネームレスとして生きたいだけだ。

私が記憶喪失者なら記憶を思い出したいと思うだろう。

記憶を取り戻したいと躍起になって、自分を知っている人物探しにいくだろう。

だが私はナナシ・ネームレスだ。断じて記憶喪失者何て奴ではない。

確かに、この身体の前持ち主は記憶喪失者なのかもしれない。

ソイツには楽しい記憶があったかもしれない。

悲しい記憶があったかもしれない。

何かすべき任務があったかもしれない。

思い出さなければいけない何かがあったかもしれない。

だが、私には関係無い。

ソイツが誰なのか、何者なのか、どんな人間だったのかなんて知らない。

知らないヤツのことなんか考えようもないのだ。

私は知らない。何も知らない。唯一、この時代と一致するのは魔法と一般知識のみ。

しかし、それはソイツを体現しているのではない。

この知識も魔法も、私が産まれた時から覚えていたものだ。

断じてソイツの記憶じゃない。今考え、生きている私の記憶だ。

ゆえに私とソイツは既に別の人間である。

つまり、私が自分の人生を割いてソイツを思い出してやる義理など微塵もないんだ。

ソイツがソイツ自身を思い出すまでは、この身体は私の物だ。

私のために成長し、私のために存在する身体。

ゆえに私は一人の人間なんだ。

ナナシ・ネームレスと言う漆黒の背広を纏った白髪に赤目の人間なんだ。

ソイツは何時か現れる。ソイツが記憶を思い出すことによって……。

その時、私と言う存在はソイツと言う存在に消されて死ぬだろう。しかし、その時まで私がこの身体の主なのだ。

「今の私はナナシ・ネームレスと言う人間だ！」

まるで自分に言い聞かせるように腕を振りながら私は叫ぶ。しかし、すぐに疑問が私を襲った。

じゃあ私は何をしたい？

婆さんの言う通りナナシ・ネームレスは何をしたいんだ？

「もう一度聞くよ。あんたは何かしたいことはあるかい？」

「……ないかもしれない……」

この世界で、この時代で、私は何をしたいんだ？

ただ情性に生活をするのか？　せつかく生きているのに？

しかし私はグータラすることが好きだ。だが、それは婆さんが居てこそ出来ることだ。

婆さんが死んだらグータラに過ごせるのだろうか。

いや無理だな。飢え死にや路頭に迷うのは目に見えている。

しかし何をすればいいんだ？　私は何をしたいんだ？

「やりたいことなんかわからねえよ」

私の小さな呟きはお構い無しと、婆さんはふんつと鼻を鳴らし喋り始める。

「まあ、それが当たり前さ。誰もが産まれた時からやりたいことがあったら苦労はしないよ。それを知るために勉強をするんだ」

「知るために勉強？」

「そうさ」

そこで一呼吸置くと再び婆さんは話し出す。

「あんたは毎日グータラに過ごしてきたんだ。やりたいことなんて考えたこともなかったろうね。でもだからこそ、今は理解出来るはずだよ。ただ黙っていても、空を眺めていても、何も進まないことをね」

「……じゃあどうすればいいんだよ……」

「さっきも言ったじゃないか。まずはやりたいことが見つかるまで勉強をしてみな」

「……むう……」

「勉強をしておきさえすれば、やりたいことが見つかった時に必ず助けになるはずさ。やりたいことが見つかった時に後悔はしたくないだろう？だから勉強はしておきな」

「勉強……か」

釈然としないが婆さんが言っただ。一応やれるだけやるか？

しかし勉強をしたからと言って、やりたいことが見つかるのだろうか？

いやいやいや、勉強はあくまで何かしたいことを見つけるための猶予期間であり……むう？

訳が分からなくなっただぞ？

そう言えば、この勉強は私が独り立ちできるようになるためのものなんだよな。

つまり婆さんが言うには勉強すれば何かしたいことが分かるかもしれないと言うこと。

だから勉強をしておけば、婆さんが居なくても路頭に迷わないかもしれない。この時代で生きていける。

そう言えば、この時代は知らないことばかりだ。

この森が大陸のどこにあるかも知らないのだ。

私は何も知らない。そうさ、何も知らないから勉強するんだな。

うむ、そうだな。まずは勉強を試みよう。

知識や魔法を貪欲に習得して独りで生きれるように頑張ればいいじゃないか。

そうすればやりたいことも見つかるだろう。この時代で私は生きて行くことができる。

グータラに生きることは何時でも出来るしな。

一年ぐらい頑張ってみるか。

⋮

⋮

⋮

婆さんに礼を言った後、すぐに部屋を出た。

決めたら即行動だ。やるならしつかりとやらないとな。

「エルザ、明日から私は頑張るよ」

「そ、そうか（部屋で何があったんだ？別人のようじゃないか！？）

」

「ああ、よろしく頼む」

何やら驚いているエルザはさて置き、計画書をきちんと見るか。
何をするか見ておかないとな。

何々、朝は知識系。昼は運動系。夜は薬学系と言ったところだな。

ふむ、ふむ、なるほど。

つまり自由時間は食事と風呂と寝る時だけと言ったことか。

よし明日から

「やってられるかあ!？」

こんな紙切れなんぞ、どっかに飛んでいけ!

「あつ! 私が書いた計画書を投げるな!」

てか、ハードスケジュールすぎじゃね!? 自由時間がないじゃねえか!?

「ああ、紙に皺が。せつかく綺麗に書けていたのに……ナナシのバカ……」

「なあ? エルザ」

「……なんだ?……」

紙切れを拾い、少し涙目になっているエルザに……何で涙目になっているんだ。

まあいいか。とにかく私はエルザに問い掛けた。

「どれか減らさないか？ 私は何かを見つける前に過労で死んじまうよ？」

「駄目だ。絶対、計画書通りやるからな！」

「絶対？」

「絶対の絶対だ！ お前は男だろう！ 一度決めたことは貫き通せ！」

「うへえ」

明日から大変な日々が続きそうだ。うむ、辛かったら逃げることにしよう。

喪失者（後書き）

補足

ナナシは記憶喪失者とは別の存在と考えている。いや考えたいと言
う話。

それと混乱しながらもポーリユシカに言われた通り勉強を頑張ろう
と思い立った話。

読みにくかったですよね。混乱の描写は難しいです。

記憶関係は今回で一端収束します。

展開遅すぎますかな？

使い

私が勉強をすると決意した次の日。

既に時間は夕方である。私とエルザは森の開けた場所で休憩を取っている。

地べたに座り背後にある木に寄り掛かり半日の疲れを癒やす。今日は大忙しだったからな。

早朝、気持ち良く寝ていた私はエルザに馬乗りをされて目を覚ました。

腹にエルザの全体重がのしかかり破裂するかと奇声を上げたのは苦い思い出だ。

早朝は婆さんに頼まれた薬草採取をエルザに手伝って貰いながら終わらせた。

それが終わると初めての勉強開始だ。

朝は知識系と言うことで、婆さんが用意した本を読み進めるのが勉強内容だ。

最初から難解な話が多く頓挫しそうだった。

だが、ここで救世主現れる。

そう、今日はエルザがいるのだ。そのため口頭で教えて貰いながら本を読み進めることができた。

本の内容は魔法界のあれこれ。

私もギルドには所属していないものの、一応、魔導士の端くれである。

そのため魔法界をしっかりと理解していなければならぬらしい。

例えば、魔法界の頂点は評議会であることや、その評議会に従わないギルドなどの話だ。

たぶん一人で読んでいたら分からないことが多かっただろうからエルザには感謝している。

ちなみにエルザが来るのは週に一回か二回ぐらいなので、分からないところがあったら婆さんに聞くしかない。

おおつ。そう言えば、この東の森の位置する場所が分かった。

大陸西側、フィオーレ王国のマグノリアと言う街の近くにあることらしい。

これまたエルザへの質問で分かった。エルザ様々である。

それにしてもフィオーレ王国は知っていたが、場所や街は知らなかったので何だがスツキリ。

それにエルザが所属するギルド、フェアリーテイルもマグノリアにあるらしい。

うむ、新事実ばかりだ。エルザの次は勉強様々という奴であるな。

知らないことを知るのは、何だが気分が良いものだ。大変でキツいと考えていたが、意外に勉強は楽しいものであることを認識した。

それに今回は頑張ろうと意気込んでいたためか、意外と早く昼になっちゃったよ。

知識系の勉強は為になることばかりだ。今後も頑張ろう。

しかし、次の運動系が問題だった。

内容は殆どが、その名の通り運動ばかりだ。

ランニングや腕立てなどキツすぎる。挫折物さ！

考えてみれば私は生まれてから運動らしい運動をしていないのだ。

腕立てなんか30回が限界。走るなんてとんでもない！？

先程まで親切に勉強を教えてくれていたエルザが鬼に見えたほどだ。

逆に運動系の後半、魔法練習は楽しいものであった。

やはり魔法を使うのは良い。使う度に体の活力が湧いてくる。

エルザにそれと言うと不思議がっていたが、何だが魔力の巡りが良くなるのだ。

運動系は前半地獄で、後半天国だな。

婆さんが設定してくれた最低限の運動とナイフの練習を終わらせたら魔法練習を多めにやってみるか？

「ナナシ。暗くなってきたから、そろそろするぞ」

おっと、忘れていた。エルザと模擬戦をするのだった。

休憩は終わりと言うことか。

「ほら、早くしないか」

何時の間にか横に立ち、手を伸ばして催促するエルザ。

その手を握り立ち上がる。

……柔かい手だ……この手で扱う剣に私は負けたのか……むう。

「ナナシ？」

「あ、ああ。始めようか」

ずっと掴んでいたのかエルザは訝しげに此方を見ていた。すぐさま振り払う。

「むっ。ちょっと乱暴ではないか？」

「柔かいお前が悪い」

「え？」

眉を寄せた顔からキョトンとし始めたエルザは置いておこう。

さて、エルザとの模擬戦は勉強の一部ではない。レッスンの一部だ。

エルザが言うには私の力量では魔導士として食っていけないらしい。

……失礼な奴だ……。

もう一度言おう。実に失礼な奴である！

今日こそ、エルザを倒したい。過去一回は惨敗だったからな。

今回は華麗に倒して撤回してもらおう！

そう気合いを入れた私は少し離れたエルザと向き合う。

エルザは虚空から剣を。私は影からナイフを取り出した。

「何故ナナシはナイフを使うんだ？不思議だ。私が考えるにコイツは……」

ん？何ぶつくさ言ってた？まあいいか。

それより模擬戦開始だ。

一見、理性的で可愛い風貌のエルザだが、侮ってはならない。

エルザは恐ろしい女で、私の得意な接近戦で全く勝てなかったのだ。

前回のようになんか浅慮かつ本能的な反応はダメだ。

「ナナシ、それでは始めるぞ」

「ああ」

ダメだ、ダメなんだ。分かっている。しかし、残念ながら私にはそれしかできない。

だが、それでも勝ってみせよう。

「行くぞ！」

：

：

：

東の森にある木々が切り倒された小さな広場には二人の人が居た。

エルザとナナシの二人だ。

二人はお互いの手に持った剣とナイフを振り回し戦いあっている。

お互い真剣な顔をし、模擬戦と言うより実戦に近い雰囲気だ。辺りに立ちこめていた。

何も喋らずに二人は斬り合い、辺りには剣とナイフがぶつかり合う音がするだけだ。

運動が嫌だと宣っていた割には、ナナシはよく動く。

小さく軽いナイフの利点を生かし何撃もエルザへと刺し、薙ぎ、穿つ。

しかし、その全てはエルザが握っている剣によって防がれていた。ギリギリ防がれているのではない。余裕な動きで防がれているのだ。

「だあ！何で当たらないんだ！」

剣とナイフの激突は何回も続き、状況に展開がないためナナシは苛つき始めていた。

一方、エルザは沈黙を守り、ただ無言でナナシとの戦いを続ける。

エルザの目はナナシに向けられているが、ナナシの闘志溢れる目とは違い、冷めた観察する目だ。

しかし勝つ意志がないわけではない。

ナナシの一手一手を見ながらも、的確に勝つために一撃ずつ斬撃をナナシへと打ち込む。

そして、今までにない一直線に鋭く振り下ろされた重い一撃がナナシを襲う。

「ぐう!?!」

「むっ、やるな」

それをナナシは受け止めた。エルザは自身が出した斬撃をナナシが受け止めたことに感嘆の声を上げる。

だが、ナナシはその一撃をナイフで受け止めるのが精一杯だったようだ。体勢を崩し掛けている。

「ふむ、防御は並か」

その体勢のまま何やら呟いたエルザは、再び素早く剣を振るった。

しかし、結果は空振り。その理由はナナシが素早く後方へと下がったからだ。

だが足で素早く下がったのではない。足は踝^{くるぶし}まで自身の影に沈んでいる。

「影魔法か」

あまり動揺せずに、エルザはナナシの背後にある木々を見る。

何時の間にか木々には、ナナシの影から飛び出た漆黒の手が絡まっていた。

「御名答！」

不敵に笑うナナシは漆黒の手に引つ張られながら後方へと勢い良く下がっていく。

【影槍！】

そして離れると共にエルザの影から漆黒の槍を突き上げた。

「あまい！」

だが、エルザは分かっていたかのようにヒラリと横に避ける。

「同じ手は何度も効かないぞ！ ナナシ！」

【黒羽の鎧！】

エルザは一瞬で違う鎧に換装すると一気に踏み出す。

どうやら今までののは馴らしだったようだ。

たった数歩でトップスピードに乗ったエルザは、後方に土埃を巻き上げながらナナシに近付く。

一方、ナナシは

「あつ！ずりい！？違う鎧とかあるのかよ！？」

そう叫びながら片手を上に向けると、すぐにエルザの方向へ降ろした。

【四つ闇！】

突如としてナナシの背後から、無数のどす黒い三日月型の何かが出現。

何かは勢い良く回転するとナナシの合図と共にエルザへと飛び出す。

それは影で出来た刃。鋭く何者でも切り裂きそうな刃であった。

どす黒い三日月型をした刃は縦横無尽に動きながらエルザへと迫る。

「やはり！」

一方、ナナシの魔法を見て何かを確信したエルザは影の刃を切り裂きながら喋る。

「ナナシ！一端、戦闘を止める！」

しかし戦闘に集中しているナナシが聞いているはずもない。

エルザが影の刃に気を取られているうちに再び攻撃を仕掛ける。

【影槍！】

「むっ！ナナシの奴。話を聞いてないな！」

足元から出てきた槍をギリギリで避けつつも、迫ってくる刃を相手にするエルザは苦悶の声をあげた。

：

：

：

おっ！ 四つ闇と影槍を出したらエルザの動きが止まったぞ！

これはいいコンボかもしれないな。

よし！ 今のうちに接近してナイフで倒してやんぜ！

「昨日の雪辱晴らしてやらあ！」

気合いを入れて地面を蹴り走り出す。もう体力が限界だ。全身がガクガク震えているよ。ナイフなんか取り落としそうだ。

でも頑張れ私！

エルザは今だに佇んだままだ。

エルザまで距離ゼロ！ よし、行ける行けるよ！ 私の接近戦をトクとみよ！

くら……え？ 拳が目の前

「エルぶはあ！？」

「お前は人の話を聞けと何回言ったら分かるんだ！ 馬鹿者！」

「鼻が！？ 鼻があ！？」

⋮

⋮

⋮

結局、負けちゃった。

鼻血が止まんないや。

まあ、今回は惜しかったな。

エルザを倒すまで後少しだったから……どうやら体力が続かなかったのが敗因のようだ。

運動は地獄だが最低限の体力は付けよう。

「痛っ！」

「ナナシ」

「抓るな！　まだ鼻血が出てるんだよ！？」

「もう止まっている」

「あれ？　本当だ」

私が心の中で反省会をしていると、エルザが何やら話し掛けてき

た。

って、話し掛けてきたとか生易しい物ではない。顔を、しかも鼻を抓ってきやがった！

「てか私のプリティーフェイスになんてことを！」

「……三度の戦闘で感じただのだが……」

え？ 無視？

しかも三度じゃねえよ。二度の間違いじゃ

「お前は完全に中距離型の魔導士ではないか。何で接近戦なんてやっているんだ？」

「は？」

何だ、コイツ。また意味分からねえこと言ってるぞ。

手に持ったナイフをクルクルと回しながらエルザに問い掛ける。

「おまつ。どうみたら私が中距離タイプなんだよ。見てみるよ。このナイフの上手な回し方。ナイフ使いナナシとは私のことだよ？ 私は接近戦タイプの魔導士だ」

「ナイフ使いナナシ？ ポーリユシカさんが名付けたのか？」

「いんや。ちげえよ？」

「む？ お前は昨日までポーリユシカさん以外知り合いは居ないんじゃないかったか？」

「ああ。そうさ」

「じゃあ誰が言ったんだ？」

「私だ！ ナイフを使った接近戦は大の得意なんだ。今日は負けたけど今度は勝つぞ！」

「……聞くが、その接近戦が得意なのは何故だ？……」

「家に出てくる黒い奴には連戦連勝なんだ。エルザに負けたのが初めてだ」

「……はあ……」

何か溜め息吐かれた。てか何だ、その呆れた顔。

「お前は接近戦はしない方がいいぞ」

「はあ？意味分からねえ」

いきなり何を言うかと思えば、やれやれな奴だな。

そう考え、肩をすくめていると、グイツとエルザが近付いてきた。やはり可愛い。こんな女に私は負けたのか。

「いいか？」

「な、何だよ」

「お前はナイフ使いじゃない。ナイフの使い方は素人だ。適当に振り回しているに過ぎない。というかナイフ使いは魔導士ではないだろう」

「え？嘘だ。エルザだって剣を……」

「私の魔法剣だ。ただの剣ではない」

わ、私のナイフだって森で拾った奴だぞ！ 聖なる東の森に落ちていたから何かが宿っているはずだ！

てか大体、影魔法は補助にすぎない。私の華麗なるナイフ捌きがあるからこそ、その補助として使えるんだ。

そのことを懇切丁寧にエルザに説明してやる。説明中、鼻から垂れてくる残りの鼻血対処はエルザがやってくれた。

説明を聞き終えたエルザは私の鼻を摘みながら尋ねてくる。

「ちなみに影魔法は幾つ覚えているんだ？」

「二桁以上だ！」

そう自身満々に言うのと再び溜め息を吐かれた。失礼な奴だ。影魔法は使い勝手がいいんだぞ？

「いいか、ナナシ？」

「あ？あんだよ」

「はつきり言おう。お前は影使いだ。それに中距離型の魔導士だ」

え？ まだ言ってるのかよ。

：

：

：

あれから数時間後、私は自宅へと帰ってきていた。そして現在は

婆さんから薬学を教えて貰っている。

教えて貰っていると言っても、これまた本を読むだけだ。

だが、本を読むだけでなく、その内容を一字一句覚えなといけならしい。

薬は一つでも手順を間違えるとヤバいことになるらしい。ましてや人に与える薬は細心の注意が必要なのだ……。

まさか、夜が一番ハードだとは思ひもしなかった。朝と昼で体も頭も悲鳴を上げている、休憩したいよお。

ちなみにエルザ達は帰っ

むっ。そう言えば思い出した。エルザ曰わく、私は接近戦はダメらしい。

ましてや補助の影魔法の方が主体だなんて言うのだから、チャンチャラ可笑しいアドバイスだったな。

私はナイフ使いナナシだ！

今は勝てなくても勝てるように頑張れいいじゃないか。

そうさ！ よし！ 明日からナイフの練習を

「……あんた、薬草の種類と配合は覚えたのかい？」

「……まだ……」

「だったら早くおし！」

「あい」

その前に今日は寝れるのだろうか……。

エルザよりスパルタすぎるよ！ 婆さん！

使い（後書き）

次は半年後まで飛ばす予定。

半年後

月日は経ち、私が勉強を始めて半年が経つ。

この半年の間に私は色々と成長することができた。知識は十分に蓄え、エルザよりも知識量は多くなった。

今ではエルザが『頼む。教えてくれ！』と泣きついてくるほどだ。

婆さんには、治癒魔導士として認められ、巷では治癒魔導士ナナシとして活躍！

そして！ そしてエルザとの模擬戦は全戦全勝！これまたナイフ使いナナシとして有名だ！

もう笑いが止まらないな！

HAHAHA！ HAHAAHA！

HAHAHA！ HAHAAHA！

……と言つ夢を見た……。

テンションがた落ちだ。

半年だ。半年でそんなに成長するわけがないだろう。

……夢の中の私は馬鹿野郎か……。

しかし期間だけは正しかったな。確かに半年は経った。

そして現在は深夜のほず。私は自室にて薬学の勉強をしていたはずだ。

だが途中で力尽き、机に突っ伏して眠りこけていたらしい。

まったく、体がバキバキだ。早く今日の勉強を終わらせて寝ることに……え？

「嘘だろ？」

立ち上がり、体を伸ばした私の目に信じられない光景が写ったのだ。

「……窓の、窓の外が明るい……だと」

窓の外は暗闇ではなく、青く染まり始めていた。深夜ではない……
… 早朝だ。

最悪だ。最悪すぎるぞ。もう起きる時間ではないか！ 寝た気が全くしない。

いやいやいや！ まだ寝れるはずだ！ 後少しばかり時間は残っている。

いぢ。ベッドへ。

早く寝て今日の勉強に備えないと！

：

：

：

）数十分後）

「ナナシ！朝だぞ！」

肌寒い早朝の時間。誰かの疍高い声が部屋に響き渡った。

「……………あー？……………」

そのことにより熟睡していた私の意識は無理矢理、浮上させられたのだ。

「起きろ！」

誰だよ。非常に煩いし、今の私はベッドでふかふかの布団を被り睡眠中なのだ。

「……出ていけ……」

「何だと！ お前のために朝早く来たんだぞ！」

うるさいぞ。誰かは知らないが、私のために朝っぱらから活動しているのなら、現状を試してみろ。

そして何が私に取って最善か判断しろ。

「聞いているのか！」

「……出ていけ、馬鹿野郎が……」

「むっ、せっかく来てやったのに（仕方ない。また馬乗りになるか）起きろ！ バカナナシ！」

「……起きねえよ。馬鹿やぐええ！？ な、何だ！？ 敵か！？」

「ようやく起きたか」

「って、あれ？ え、エルザ？ なして？」

どういうことだ!?

気持ち良く寝ていたはずの私の上には何時の間にか、魔獣エルザンが馬乗りになっていた!?

そ、そんなことは有り得ないはずだ。

今週分のレッスンは終わったはずだ。つまり来週まで、エルザはこの森には来ないはずである。

むっ、なるほど。答えがわかったぞ。つまり、つまりだ。

「……夢か……」

何とも不思議な夢だな。腹の上に跨るエルザの温かい感触まで表現されているとは……。

「夢じゃない!起きろ!」

ふむ、それにしても女と言うのは、どうしてこんなに柔らかいのだろうか。実に不思議な生き物だな。

いや柔らかいと言う表現では表せない。やわやわだ。そう、やわや「起きろ!」

「あぶんっ!?!」

ぐおおお！？ ビンタの感触まで再現されているだとお！？

「まだ起きないか。往復ならどうだ？」

夢にしてはやりす「あぶぶぶっ！？あにすんだ！痛えだろうが！」

「ふう、やっと起きたようだな」

⋮

⋮

⋮

夢じゃない。夢じゃなかったんだ。

今の私は鎧を着けていない普段着のエルザに馬乗りにされている。

そして両頬がこれでもか！　と言っぐらいに、真っ赤になっている状況だと思う。

「おはよう、エルザ」

「ああ、おはよう。きちんと挨拶出来るようになったな。感心感心」

「……でも頬が痛い……」

「起きなかつたお前が悪い」

「もうちょつと穩便に起こしてくれよ」

「それにしても部屋が汚すぎる。一昨日、掃除したのに何でこんなに散らかっているんだ？」

え？ 無視された？ てか……今日は黒か。うむう。

「エルザよ。毎回、人の腹に乗るのは止めろよ。それに見えてるぞ。恥ずかしくないのか？」

「お前に見られても恥ずかしくもなにもない」

「oh」

ひ、ひでえ。これでも私は男だぞ！？ もう少し恥じらいを持つた方がいいのではないか……。

「そんなことより、この部屋の状況はなんだ！」

馬乗りになつたエルザは、そのままの格好で尋ねてくる。エルザ

が言う部屋の状況とは、この自室のことだ。

現在、部屋の状況は薬学の本や薬草がいたるところに散らかっている状況だ。

足を踏む場所は……探せば見つかる。

うむ、何時もと変わらないな。どこが汚いのか分かるが片付けはめんどくさい。てか最近は

「婆さんの薬学が忙しいから片付ける暇なんてないんだよ！」

「むっ、また言い訳をして！」

「言い訳じゃねえよ！本当のことだ！」

そう、本当に忙しい。今の私は毎日が忙しいのだ。最近は勉強の途中に寝ることなんてザラだ。

今日も何時の間にかベッドに入っていた。本当に不思議である。

さて、エルザのレッスンと婆さんの教育が始まって半年が過ぎている。

ここ数ヶ月で私の生活スタイルはがらりと変わってしまったのだ。

早朝の睡眠が薬草採取に。

朝の森林浴が、青空教室に。

昼のベッドでゴロゴロが、大地で汗水流す運動に。

はたまた夜の瞑想時間が薬学の勉強時間に変わった。

エルザと出会ってから毎日は大忙しだ。いや大忙しと言っ言葉
を越えていると思う！

食事や風呂、寝る時以外は勉強ばかりで、私は数ヶ月前のグー
タラな生活が恋しくてしょうがない。

だが、まあ勉強すること事態は意外に楽しいものであった。特に
朝の知識系は面白い。

最近知識量も増えてきて本をスラスラと読めるのだ。それに運
動の方もなかなか好調だ。

婆さんが設定してくれた最低限の体力作りは出来るようになった。

一キロのランニングなんて楽勝だぜ！　だが二キロは無理だ。そ
の後のナイフの練習と魔法の練習もしっかりやっている。

しかし、しかしだ。残念ながらエルザとの模擬戦では勝つことが
出来ていない。

だが、まだ半年だ！ 何時かエルザに勝てるように頑張らねば！
ちなみに影魔法はかなり連度が上がった。補助のくせにナイフ術より上手く扱えるとは……。

それもエルザから見たら異常な成長を遂げているらしく

『接近戦を止める！馬鹿者！影魔法だけ使え！』

と、エルザが怒鳴ってくるのだが、そんなことはどうでもいい！
私はナイフの練習を頑張ろう！

エルザのレッスンで友も増えたし、勉強自体は楽しい。毎日が充実している。しかし夜が最悪だ。婆さんの薬学が大変なのだ。

おっと言い直そう。

エルザのレッスンと朝と昼の勉強は楽しい。半日は充実している。
だが薬学が辛いのだ。

薬学は薬草の種類、配合など色々と覚えることある。それに最近
は、薬を自分で作っている。

だが、作った薬は自分の体を使って実験をするため、体調が悪く
なることもしばしば。

婆さんはエルザ以上に鬼畜だったのだ。毎日、課題も出る。もう
大変すぎるよ。

これらが適度な勉強時間だったら楽しく興味深々に出来たのだが
……変更はしてくれない。

つまりだ！

「毎日が、特に夜が忙しいから片付けなんて無理だ……」

「本当に勉強はやっているのか？片付けをサボりたいから言ってい
るのではないか？」

「やってるだろうが！毎日大変なんだぞ！」

「皆、大変なんだ。お前だけが忙しいんじゃない」

そう言つと馬乗りになっているエルザは体を傾かせ、私の胸に手
をつく。

そして呆れた顔から少し微笑んだ顔、つまり可愛らしい顔をグイッと近付けてきた。

「何時も言っているだろう。私も頑張っているんだ。ナナシだって頑張れ」

「……わかっているよ……お前は何時も手厳しいな」

「それぐらい言わないと理解しないだろうからな」

「むう」

エルザの言う通りだな。愚痴を言うのは、もう止めにしよう。

エルザだって頑張って強くなっているのだ。私も愚痴を言う暇があつたら頑張ろう。

と、毎回エルザの顔を見ると考えてしまう。コイツといると、また頑張ろうと言う気持ちになるのは不思議だ。

それにこの半年で、私はやりたいことが見つかったような気がする。

毎日勉強して、時々エルザと模擬戦や、エルザ達同世代の奴らと会話したりと充実した毎日を送っていた私は、やりたいことが見つかったのだ。

それは些細なもので、ただ充実した毎を送りたい……というものだ。

本も読みたいし、魔法も使いたい。ご飯も食べたい。強くもなりたい。つまり何でもやりたいのだ。まあ大変でキツイのは嫌だが……。

しかしなあ、充実した毎日とは曖昧すぎる。まだまだ半年しか経っていないからな。

もっと色々と考えてみよう。

「それより時間だ。早く行かねばポーリユシカさんに怒られるぞ」

私から離れたエルザは床に落ちている本を一カ所に積み上げながら、言葉を紡ぐ。

「ほら、早く起きないか。朝ご飯を食べたら片付けをするぞ。その後は薬草採取を手伝ってやる」

「へいへい」

既に意識は覚醒しているため、すぐさま起き上がる。

薬草採取は手伝って貰わなくてもいいが、エルザといると和むから問題ない。

それにしても、何だか子供扱いされているようで釈然としないぞ。

てかそんなことより

「何でいんだよ。明日から仕事があるんじゃないのか？」

「何だ？ 来てはいけなかったか？」

「いや、来るのはいいが……仕事の準備はいいのか？」

「仕事先はここなんだ」

「ここ？」

「お前を街に連れて行く」

「何！？ ついに街デビューか！？」

おおっ！ だからエルザが居たのか！

「ああ、私も覚悟をしないとな」

ん？ 何で疲れたような顔をするんだ？

まあいいか。エルザは放っておこう。だって街に行けるからな！
いやあ興奮物だ

なんせ私は街に、いや人里に降りたことは一度もないのだ。婆さんから止められていたからな。

しかし、つい最近、エルザの付き添いが条件で婆さんから許可が降りたのだよ！

何時になるか楽しみに待っていたのだが、まさか今日だとは……。

しかし嬉しいぞ。これでナツ達にも会いに行けるじゃないか。今までではあっちから来るだけだったからな。

よし、婆さんから小遣いをたっぷり貰ってマゲノリアに突入してやる！

半年後（後書き）

今回は半年まで一気に飛ばしましたので、これから半年掛かるまで
数話使う予定です。

マグノリア

空は雲一つなく陽光が澄んで、すがすがしい昼間。

マグノリアの街は昼間であることもあり、活気に溢れている。特に商業区は多くの人が行き交い活気に溢れていた。

通りには様々な店がある。どの店も綺麗に手入れされており、何軒かの店では客が入って賑やかに買い物をしている。

そんな一つの店から真新しい漆黒のスーツを着たナナシとエルザが出て来た。

「背広の新調をしなきゃならなかったのか。道理で婆さんが街へ行くことを許可したわけだな」

店から出たナナシは通りを歩きながら、自身のスーツを触る。

「お前も身長が伸びたからな。そろそろ換え時だったんだ。丁度よかったではないか」

「エルザは抜いたからな。全く持って自分の成長期が恐ろしいぜ」

ナナシは不敵に笑いながら左手をエルザの頭と自分の頭を行き来させた。一方、エルザはむっと、ふてくされた表情に変わる。

「ちょっとではないか。まだ私が負けたわけではない！」

「無理無理、私はドンドン伸びるからな」

「むっ！」

この半年で身長が伸びたナナシは遂にエルザを抜いていた。今日のマグノリアデビューは新調したスーツの受け取りのためであった。

真新しいスーツを着たナナシは嬉しそうに街を見渡す。

「それにしても街は色んな物があって面白いな。見るよ、人がわんさかいるよ！」

「そうだな。それに今日は仕事が休みの人も多いから普段より多い」

「おお！なるほど！」

ナナシはキョロキョロと辺りを見回しながら歩く。一方、エルザ

はハラハラとした面持ちでナナシの袖を掴んでいた。

家を出る直前、ポーリユシカにナナシを一人にしないよう、口を酸っぱくして言われていたのだ。

エルザはポーリユシカに言われずとも、ナナシを一人にするつもりはなかった。

「楽しいのは分かる。でもいいか。ナナシ？」

「ん？あんだ？」

「頼むから今度は居なくなるなよ？」

一人にさせるつもりはなかった。だがナナシは、既に一度エルザの前から姿を消していたのだ。

「大丈夫だ！私を誰だと思っている！―」

「……だから信用ならないんだ……」

ナナシが消えたのは到着してすぐの朝のこと。エルザが街の様子を眺めている時。

朝早くナナシを迎えに行ったエルザは一瞬、眠気に襲われ欠伸をした。

だが、その欠伸がいけなかった。何故なら欠伸を終えたエルザが、ふと横を見た時にはナナシは居なかったからだ。

『馬鹿者があ！？』

エルザは必死に走った。ナナシを探しに。そして懸命に探し見つけた時には既に昼。

賞金付きの大食い店から満足そうな顔をしたナナシが出てきた所を確保したのだ。

『ちよつと金が欲しぐふう！？』

『探したんだぞ！この馬鹿者！』

『や、やめっ！？』

店から出て来たところを取り押さえたエルザは、ナナシをしこたま殴ったそうなの。

「次は絶対にエルザから離れねえよ！約束だ！」

「……………はあ……………信用できん」

時刻は昼過ぎ。

ナナシの街デビューは始まったばかりだ。

⋮

⋮

⋮

ナナシとエルザの二人は街の通りを並んで歩く。

エルザはナナシの袖を掴んでおり、肩が当たる距離まで近付き歩いている。端から見れば仲の良い子供達だ。

実際はナナシが逃げないように握っていると言つ真実があるのだが、口にしない限りそうは見えないだろう。

そんな二人は街の人々に微笑ましく、はたまた小さいカップルとして憎たらしげに見られながら歩いていた。

街の風景を嬉しそうにキョロキョロと見るナナシ。そのナナシを見ながらエルザはふと気付く。

「そう言えば髪も結構伸びたな。結ばないのか？」

「髪？」

話し掛けられたナナシは街を見るのを止め、エルザに目を合わせる。

一方、エルザはナナシの長く純白に光る髪を撫でる。

「ああ、そうだ。結構伸びてきたからな。切るか結ぶかした方が良くないか？」

「確かになあ」

そう言うナナシは深く考えてないように気のない返事をして自身の髪を前髪を触る。

この半年の時間にナナシの髪は背中の中間辺りまで伸びており、無造作に下ろされていた。

「短く切るならいい場所を教えてやるぞ？」

「いや切りはしねえよ」

即答したナナシは端正に整った顔と涼しげな眼に似付かわしくないニヤリとした笑みを浮かべる。

「エルザ知ってるか？ 髪には魔力が宿るんだそうだ」

「ほう、初耳だ。誰から聞いたんだ？ ポーリユシ力さんか？」

「いんや。東洋の神秘という本だ。東洋は凄いんだぞ！ 色々勉強になることが多くてな」

そう誇らしげに頷くナナシは何かを思うように目を閉じ始めた。そんなナナシを見てジト目のエルザは溜め息を吐く。

「……また眉唾ものの本を読んだな……」

「東洋は素晴らしい！」

「ふむ、髪を切らないなら結んだ方が良さだろう。髪留めを買いに行くか。次は左だぞ、ナナシ」

「それにな、東洋には忍者と言うナイフ使いが居てな……」

「またコイツは話を聞いてないのか」

ナナシの様子を見たエルザは拉致が飽かかないと考え、袖を引っ張り歩く。

「忍者ナイフの名前がクナイとか言う物で……」

「それなら魔法剣の一つにあるぞ。珍しくもなんでもない」

「なんと!？」

「……私の声が聞こえているだと……お前の耳はどうなっているんだ!」

エルザは袖ではなく、ナナシの耳を引っ張り歩く。

「痛い痛い痛い!？」

それから数十分後。

辺りは人の手で整えられた木々が並んでいる。木々の間には石畳の大通りが広がっていた。

その横には石造りや木製の建物が出来ている。その建物の一つにエルザとナナシがいた。

ナナシは先程の無造作に下ろした髪ではなく、銀筒の髪留めで結んでいる。首筋から一本の白髪が垂れ尻尾のようだ。

ただ後ろ髪だけを結んでおり、耳を覆い隠し肩まで垂れている横髪は、そのままだ

さて、そんな二人がいる建物はマグノリアに複数ある魔法具屋の一つである。

先程、エルザにクナイのことを聞いたナナシが髪留めを購入した後、行きたいと続ったのだ。

「おや、エルザちゃん。デートかい？」

「いえ、子守です」

「oh」

そこはエルザ行きつけ店である。若い男性店主と仲良く喋るエルザ。

その横には子守と言う言葉に衝撃を受け、よよとへたり込んでいるナナシの姿があった。

「むっ！」

しかし、何かに気付いたナナシは、すぐに気を取り戻し立ち上がり店主に詰め寄る。

「それより店主！クナイとやらを出しやがれ！」

ナナシは詰め寄った。左手に鈍色に光るナイフを握りながら。

「ちよっ!？」

「おらクソ店主!早く出さねえと首と胴が離あぶんっ!？」

「ナイフを持ったまま人に近付くな！」

∴

∴

∴

現在、私は怒られている。ただ怒られているのではない。正座だ。

「いいか!あれほど人前でナイフを出すなと言っていただろう！」

「……前にエルザは良いって言ったじゃねえか」

「あれは悪人にだけだ！」

悪人とか判別つかねえよ。私にとつたら知り合い以外悪人に見えるな。特に店主野郎は真っ黒だ！

「ちゃんと聞いているのか？」

怒鳴り声を上げるエルザには飽き飽きだ。別にいいじゃないか。私はクナイを見たかったのだ。

まあ先程、店主野郎が見せてくれたがな。しかし残念なことにクナイには全然惹かれなかった。つまらない。

それなのに、この説教だ。余計つまらない。婆さんに貰った小遣いも増やしたし、魔導書でも買いに行くとするか。

「まあまあエルザちゃん。僕は大丈夫だから」

「本当にすまない」

ふん、エルザは店主野郎なんかと、仲良く忙しいようだから勝手にさせてもらおう。さて影に潜って移動開始だ。

【転影移】

店主野郎と目が合ったので一睨みしながら影へぐぷりと沈んだ。店主野郎は震えてやがったな。何かム力つく。今度会ったらシメテやる。

そう考えながら、適当に別の影に転移すると勢い良く飛び出す。

「きゃっ!？」

「あ?」

誰かの影から飛び出したようだ。場所は大通りか。

「だ、誰?って嘘!? ナナシじゃない!？」

私の名前を知っているだと?その声に私が振り返ると驚いて目を見開いている女がいた。

「何だ……カナか」

「何だはこっちょ! いきなりビックリしたんだから!」

「そうかい、そうかい」

私の目の前にいる女は、カナ・アルベローナ。

茶色の髪を一結びにし、ポニーテールにして、オレンジを基調としたワンピースを着た女だ。

私より年下の１１歳である。フェアリーテイルの魔導士である。

カナと出会ったのはエルザのレッスンの一環。

友を増やした方がいいとのことでエルザが森に連れて来たのだ。

他にはナツやグレイとも友になっている。アイツラは、なかなか騒がしい奴らなんだよなあ。

「てか、森から出てきていいの？ ポーリユシカさんに怒られるんじゃない……」

「今日は街デビューなんだ。では私は行くぞ」

驚いているカナは差し置いて歩く。さつさと魔導書を買に行こう。

エルザなんか店主野郎と仲良くやってりゃいいんだ。私の知ったことではない。

「あつ！ ちょっと待ってよ！」

オープン

時間は昼過ぎ。

商業区には数十にも及ぶ食事処があり、多くの来訪者により賑わっていた。

とあるカフェでは多くの者が建物に入り、食事をしている。

だが、少数の者は外に設置してあるテーブルで、通りの賑わいを見ながら食事をしているようだ。

曰わくオープンカフェといったところか。席は殆どが埋め尽くされており、店員が忙しく働いている。

そんな繁盛しているオープンカフェの一つにナナシとカナの二人が居た。出会ってから、すぐに魔法具屋に向かっていたナナシが、カナに無理矢理引っ張られてきたのだ。

「よくもまあ、そんなにいっぱい食べれるわね」

オレンジを基調としたワンピースに身を包んだ少女カナが、テーブルに広げられた料理を見ながら唸る。

二人が居る木製のテーブルには、大人でも食べきれとは思えないような大量のクリームパスタが置いてあった。

五人前以上あり、隣に座る客や通りかかった客がテーブルを二度見、三度見して啞然とした程の量だ。

それをナナシは一人で食していた。カナは胸やけがすると言い、ジュースをストローで啜るだけ。

「ん？ オヤツだし、普通はこれぐらいじゃないか？」

「全然、普通じゃない。それにオヤツじゃなくてご飯になってるから」

「そうか？ オヤツだから我慢して少なめなんだが……」

「この量で少なめ！？ 見るだけでお腹いっぱいね。どこにそんなにけ入るか不思議でたまらないわ」

「……いや、お前もな……」

ナナシはポリリユシカに仕込まれたであろう作法で、器用にフォークとスプーンを使い、パスタを食す。その一方で、カナに呆れた視線をぶつけていた。

「何よ？ 私に何かついてる？ 髪はさっきセットしたばかりだし……」

ナナシの視線が気になったカナは、キョロキョロとおかしいところがないか探し出す。

だが、いつも通りであることを確認すると、ほっと胸を撫で下ろし、再び視線をナナシに戻した。

「私って、どこか変？」

「お前……ジュースの樽飲みって初めて見たぞ？　普通じゃねえよ」

「何だそんなことだったの。これくらい普通よ普通。私にとつたら、ナナシの方こそ有り得ないわ」

「いやいやいや」

そう、カナはジュースを樽飲みしている。テーブルに載せきれなかったため地面に置かれた樽から長いストローが伸び、それを啜っているのだ。

これまた通りかかった人達が二度見、三度見した理由だ。小さな子供達が馬鹿食い、馬鹿飲みをしているのだから。

「「私より絶対変！」」

そう言いながら、食す二人を見て

（……どっちも変だから……）

そう、隣にいた客が心で呟いたそう。

「ナナシは街に来たのが、初めてだから常識を知らないんだよ」

「しかし本で樽飲みとか読んだことがないぞ」

「本は現実とは違うんだよ？」

「そうなのか？」

「もつとナナシは勉強しないとね。今日は勉強になってよかったわね」

「むう。樽飲みは当たり前か」

「そうよ。だから今日はナナシの奢りね。レディに失礼なことを言っただから」

「それも常識なのか？」

「常識よ。レディファーストって言うの。ご飯やケーキとか一緒に食べるときは、男が女に奢ってあげるんだよ」

「レディファーストねえ。街って大変なんだな。わあったよ。今回は私の奢りだ」

「やったね そうだ。お礼に良いこと教えてあげる。週サラって読んだことある？」

「あーあれかあ」

週サラ。週刊ソーサリーと言う雑誌の略称だ。ちなみに週刊ソーサリーとは、魔導士達のための情報雑誌である。魔法界に関する様々なことが書かれており、ナナシも愛読している。

「週サラーだろ。あれって表紙ないよな。雑誌なのに不思議に思ってたんだよな」

「表紙？」

「そうそう。いきなり目次とか無しに文章とかが入ってる。エルザに聞いてもそれが普通だっていうし……」

「ん？ 表紙ならあるじゃん。グラビア写真だけど」

「へ？ ぐらびあ？ 何の話だ？」

「週サラの話でしょ？」

「ああ」

「何か話が繋がらないね……」

どちらがおかしいか明白だが、話が繋がらないため、カナは話を換え始めた。

「週サラは置いといて。それより今日はエルザと一緒にじゃないの？ 街に行くには同行が条件じゃなかった？」

こてんと首を可愛らしく傾けたカナは、ストローを銜えたまま尋ねた。

「……よく覚えていたな……」

「そりゃ、ナナシが嬉しそうに何度も話せば嫌でも覚えちゃうよ。今は嬉しくなさそうだけど、街は気に入らなかった？」

「いや、まあ気に入っては……」

「それに半年経ったらフェアリーテイルに入るんでしょ？」

「……まだ考え中だ。やりたいことも見つかってないしな」

「入ってから考えればいいのに……。フェアリーテイルもマグノリアも良い所だよ。ナナシにも気に入って欲しいな。それに入ったら、何時も一緒にいれるんだよ？」

「……考えとくよ……」

カナが嬉しそうに答えた後、ナナシは眉を寄せて深く思考する顔をした。しかし、それもカナの声によって中断させられる。

「それよりエルザは？」

「エルザは魔法具屋の店主野郎と仲良く忙しかったようだからな。置いてきた」

「あゝあんだ達、また喧嘩したね」

「ちげえよ！」

「それもそつか。違うよね。何時もナナシが殴られて終わりだもんね。じゃあ、何でエルザから離れたの？」

「殴られて終わりとか失礼な奴だな。てか、さっきも言ったじゃねえか。エルザが店主野郎と」

「もしかして、また嫉妬？」

「はあ？それこそちげえよ」

「はいはい、またなの？ 本当に子どもなんだから」

「だから、ちげえって！」

ナナシのムキになった言葉に、カナは僅かに口の端を上げると、ニヤニヤと笑った。

「大体、エルザが……」

そして反論するでも意見を差し挟むでもなく、ただナナシの愚痴話を聞いてのであった。しかしナナシの愚痴が一通り終わると、既にカナの顔は笑っていないく、心配そうな表情をしていた。

「また勝手に逃げてきたのね。エルザに怒られるよ？怒られる前に謝った方がいいんじゃない？」

「何だよ。私は何も悪くないさ」

「さっき離れないって約束したんでしょ？」

「……むう……」

「エルザも朝早く起きて頑張ってたんじゃないの？」

カナが当惑した表情でナナシを見る。だがナナシは、もう喋ることはないと言わんばかりに、黙々とパスタを口にかき込んで無視し始めた。

「……全く……」

何度話し掛けても話そうとしないため、カナは頼杖を付いてナナシが食べ終わるのを見守っていた。一通り食事が終わるとカナが話を切り出す。

「エルザの話じゃなくて、私のお願いだから聞いてくれる？」

「……あんだよ」

「暇なら買い物付き合ってよ。来週、皆でクエストに行く予定なんだ」

「クエスト？ああ、ギルドの仕事か。皆ってナツ達とか？」

「そうよ。皆でハコベ山にバルカン狩りに行くんだ」

「バルカン！？」

「そうよ！凄いでしょ！討伐クエストだよ！」

「ありゃ、凶悪モンスターだぞ。あぶねえだろ」

「マスターが皆で行くなら良いつて許可くれたんだ　　五匹倒すんだ。五匹！」

カナは嬉しそうに語るが、ナナシは眉を寄せて思案顔だ。

凶悪モンスター、バルカン。ハコベ山に生息する大猿の形をしたモンスターだ。

「ありや危険な奴なんだぞ、人をな……」

「それは知ってるよ。でも大丈夫。ナツ、グレイ、エルザと一緒に行くんだから」

「それにお前もだ。ナナシ」

「むう。そうか。ナツとグレイとエルザ。それにカナと私か。なら大丈夫……え？」

ふと、ナナシの背後から聞き覚えのある声が聞こえた。ただ背後にいるだけなのに、威圧を感じ、ナナシの背を冷たい汗がドツと伝った。

ギギギと音が鳴りそうなくらいぎこちなくナナシが振り返ると、そこには

「探したぞ。ナナシ。こんなところでカナと仲良く、で、デートか。覚悟は出来ているのだろうな？」

こめかみをピクピクと動かしながら、無表情で睨みつけてくるエルザだった。

「……ごめんね……」

その顔を見た瞬間、ナナシの顔に苦々しい表情が広がり、すぐに謝ったが

「許さないからな」

時すでに遅し。

につこりと笑いもせず、声のトーンを上げたエルザに、ナナシは首根っこを力強く掴まれてしまった。

「カナ！ 助けて！？」

「またカナか！？ お前はそんなに私と居るのが嫌なのか！」

「ち、違っ！？ あ、あれはお前が店主野郎と……」

「言い訳はしなくていい！」

二人はそう言い争いながら路地裏へと消えていったそうなの。

「あゝあ」

対してカナは席に座りジュースを啜っており、時折聞こえる悲鳴に、ほれ見たことかと溜め息を吐く。そして一部始終を見ることが、ナナシを助けることもなかったのである。

…

…

…

オープンカフェにて。

「何だ、またナナシの嫉妬だったのか」

「違っ!？」

「私やナツ達の時も凄かったもんね。ボロボロになったもん……ナナシが……」

「ナツ達に接近戦を挑むからだ」

「ちよっ!?! 私の話を」

「嫉妬なら、そう言えば私もレッスンしなかったのに……」

「しょうがないよ。ナナシはへたれだから」

二人とも聞いてくれないや。てかカナよ。へたれってなんぞ!?
酷くないか!

「それより私も走り回ってお腹が空いたな。ナナシ、ウェイターを
呼んできてくれ」

「OK! 今すぐ、呼んでくるね!」

「完全に心が折れてる」

カナの奴、何言つてんだ? エルザ様の言うことは聞かなくちゃい
けないんだ。常識だろ。さてウェイターはどこにいるのかな。

あ、いたいた。

HEY! ウェイター!

∴

∴

∴

さて、エルザ様もお食事を終わられたことだし

「エルザ様、バルカン狩りは危険じゃねえか?」

「ああ、様は付けなくていい」

「へい！」

「……へたれ……」

またカナか。そんなジト目で見るなよ。何だか恥ずかしいじゃないか。てか、そんなことよりバルカンだ。

「部外者の私が口を出すのもなんだが、危ないんじゃないかね？」

「それに関しては注意すれば大事に至らないだろう。私は既に討伐経験済みだからな。それに今回はナツ達の同行みたいなものだ」

なるほど。さすがはエルザだな。既に経験済みとは……。本当にコイツは12歳の女か？

「てか、何で私も連れて行くんだ？流石にバルカン狩りはなあ」

「森バルカンは何回か狩っているのだろう？」

「まあ二回ぐらいな」

森バルカンとはハコベ山ではなく、東の森に多数生息しているバルカンのことだ。

アイツらは倒すのに一苦勞なんだが、ナイフの練習や魔法の練習にバッチリなんだ。特にナイフの練習は相手が必要だからなあ。

「噓っ！？ ナナシ、バルカン倒せるの！？」

「あ？ いや、二回だけだ。しかも補助の魔法で倒したのであって、私としては倒した気はしないんだがな」

「魔法で倒せば十分だ。大体、お前は魔法だけを使えと何度言ったら分かるんだ」

「魔法は補助なんだ！」

「体力がないくせに接近戦を挑むお前は馬鹿だ」

「ぐっ」

「……ナナシがバルカン倒せるとか信じられない……」

エルザは何時も人の弱いところを突いてくるから嫌いだ！ てか、カナは何で驚いているんだ？

「それよりハコベ山のは、こっちのよりレベルが高いと聞いたが？」

「だからお前を同行させるんだ。経験すれば強くなれる」

「おお！ 確かに！」

「ただし、ナイフは使わせないからな」

「ええー」

「接近戦で森バルカンは倒したことはないのだろうか？」

「そりゃ……ある！あるに決まっている！」

「「嘘か」」

そうさ！ 私は接近戦でバルカンを倒したことはない！ 自慢にならねえ……。

それにしても、何でコイツらには、すぐにバレるんだろう。誰か私の嘘が通じる相手は居ないだろうか。

「あんた、さっき、自分で言ってたじゃない」

「……あ……」

くう、女に言い負かされるとは。もっと修行して嘘を吐くのを上

手になって、カナ達をぎゃふんと言わせてやる！

よし、その件はそれでいいとして、今回のバルカン狩りに同行させると言うならば、私の練習相手にさせてもらおう！ エルザから離れれば、ナイフを使っても問題はあるまい。

って、そう言えば

「カナは買い物に行かなくてもいいのか？ 私も魔導書買うだけだから付き合ってもいいぞ？」

「ホント!？」

「むっ」

ふと、思い出したことを尋ねる。カナは嬉しそうに笑い、エルザは不機嫌な顔をしている。

何でだ？ 買い物の手伝いだぞ？ そろそろ時間も遅くなってきたかな。今日は魔導書と……カナが何やら言っていた【ぐらびあ】付きの週サラーをかうだけで終わりだろう。

来週はバルカン狩りだと言うし、準備が必要だ。ナイフを研いでおかない！

「本当に付き合ってくれるの？」

「ああ、もち」

「やったね 荷物持ちゲット ハコベ山は極寒の地だからね。
コートとか買ったかったんだ」

「ちよつ、手を引っ張るな！あと流石にコートは奢らないぞ」

「別にいいよ。ほらほら行こうよ」

ワクワクしながら、私の手を取って先に行こうとするカナ。

手がやわやわだ。やっぱり女の体は柔らけえな。抱き締めたら、
どれだけ柔らかいのだろうか。

「やわやわで最高だ」

「あんたは相変わらず、柔らかいの好きね」

「いやあ、何か落ち着くんだよ。そう言えば、森バルカンの毛並み
も柔らけえんだよな。やわやわで、もふもふしてるんだ」

「うわあ、私の手はバルカンと同等とか引くわ。何か変態っぽいよ」

「……ナナシがカナに取られた……」

柔らかいのなら変態で結構だ。やわやわは天国である。そう幸せに浸って歩き始めたが、エルザが着いて来ないな。俯いているが、どうしたんだ？ そう思考した時、歩く私の腕をエルザに引っ張られて止められた。

「ま、待て」

「どした？ 買い物行かないのか？ 一緒に行こうぜ。エルザが居なきゃ楽しくない」

「か、買い物は行くに決まっているだろう！ お、お前を一人にしたらダメだからな。こ、これなら離れることはできないぞ！」

そう言い、服ではなく手をギュツと握り締めてきた。マジで！？
両手とも、やわやわとか、どれだけ幸せなんだよ！？

コイツあ、森バルカンの毛並みより柔らかいよ！？

∴

∴

∴

「ほら、行くぞ」

「柔らけえ」

エルザとカナはナナシの手を引っ張って通りを歩く。3人が通りを進むに連れて、辺りは色とりどりの店が増えていった。

それらをキョロキョロしながら嬉しそうに見るナナシは、エルザとカナを両手に花状態で街を歩いたそう。

その後、何とか魔導書と週刊ソーサリーを手に入れたナナシは

「こ、これが、ぐらびあとな!? 破廉恥な! ボインボインではないか!？」

新たな道へと踏み出していた。少年魔導士は大人への……いや、変態への階段を登り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4195z/>

名無しの影使い

2011年12月28日13時46分発行